
スイッチ！！江戸っ子魔女キララが行く！！

ムナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スイツチ！！江戸っ子魔女キララが行く！！

【Nコード】

N3621G

【作者名】

ムナ

【あらすじ】

現代っ子のキララは、ごくふつつの小学生。ところが突然現れた、キララそっくりの魔女だと名乗る女の子に無理やり魔力を与えられて、和風ニューヨークともいえる魔界に送られてしまう。魔界に辿り着いたキララは、妖怪やら魔女やらに驚かされながらも、闘ったり、ケンカしたりと毎日が違う生活をエンジョイし始める。そして、やがて魔界で起こる大戦争の真っ只中へと巻き込まれてゆく

First Candy : 始まり、始まり

ぱんつと突然窓が開き、風が激しく吹きこんでくる。

カーテンがバサバサと音を立ててはためき、その後ろで誰かがバルコニーの白い手すりに立っていた。

「だれなの？」腰を構えたまま、驚きで体を動かすことができない影は、とつても長時間動かなかった。闇の向こうから、きらきらと猫のように、瞳を光らせ私を観察している。

そして、軽やかな足音を立てて、手すりから飛び降りると、部屋の中に入ってきた。

まるで、彼女の体を包むかのようにしてつむじ風が吹いて、部屋の中の物を舞い上がらせた。

「ねえ、」とその影が言った。むき出しにした膝が白く光っている。ふあふあと二つに結んだちぢれっ毛が風になびいている。

片手に古くさい帚を立てていた。

「百怪ティナ！！ただいま参上！！」を影は叫んだ。

一人の少女が、カーテンの向こうから。

姿を現した。私は少女の顔を見て、驚いて息を飲んだ。

嘘でしょ？だって、だって、身長も、髪の色も、そして大きな瞳も、ちよつと高めの鼻も、大きな口も、鏡で映したようにそっくり。

まるで私がもう一人私の前に立っているようで。

うわー、気持ち悪いよ。

「うわー、きもちわるいなー」をその妙な服装の女の子は私の前につかつかよってけると、マネキンでも見るようにじろじろ私を鑑賞した。

目の周りにパンクロックのように黒々とお化粧している。

ミニのスカートをはいた華奢な腰。

その腰には、星印の描かれた赤紫色の小袋やらネズミの頭の大きさのドクロがぶら下がっていた。

「ねえ、世の中には同じ顔の人間が3人いるというのはうそではなかったのじゃな。」と啞然としている私の頬をパンパンと右手でたたきながら言った。

なんなのよ子の女の子は。いくらに似ているとはいえ、初対面で人の顔に触らないよね?! むらむらと怒りが全身にみなぎってきた。

私の考えてることなどに気づかないのか、女の子は私からはなれど、こんどは部屋をじろじろと見つめた。

「人間の女の子の部屋って殺風景じゃな。」と遠慮もない。
机の上の写真に顔を近づける。私が小学校に入学した時に写真だった。

「ふーん、子の人たちがあなたの父上と、母上なのね。」黒々とマネキュアを塗った爪をカチカチと机に立てて、写真立てを持ち上げた。

「なんだかな。私の父上の方がもっとハンサムじゃし。母上の方が美人じゃな。」

ぱんつと乾いた音が部屋に響いた。女の子が驚いて大きい目を見開き、私も見つめた。赤くなった頬に片手を持って行く。

「冗談じゃないわよ!! あんたなんなの。人の部屋に勝手に入ってきたと想ったら、悪口ばかり言って!!」

赤くちろちろと炎が女の子の瞳に燃え上がった。その炎で瞳が赤く光り、私は、叩いた手を胸におしつけて、後ずさりをした。

「なによ!! 私にもわるいことしてないんだから。」と私は悪態をついてみたものの、どうも立場が弱い。

その子は私に近づいてきた。ああ、怖いよ!! 私どうなっちゃう

んだろう。

真っ赤に塗った口がにゅつとさけるように開くと笑みを浮かべた。その下に、尖った犬歯がギラギラと光っている。彼女の両手がぎゅつと私の方を掴んだ。もうおしまいだよー。

「はっはっは！うん、よかれよかれ。あんた最高じゃ！パーフェクト！！ぴつたり！！」と女の子がゲラゲラと豪快に笑い声を上げて、掴んだ肩を揺さぶった。

私は閉じかけた目を開けて、部屋の中で鞠のように跳ね踊る女の子をぽかんと口を開けて眺めた。さっきまでの怒りは消えて、疑問が心の中を飛び交った。いったい、なにが目的なんだろう？

踊りを止めると、息を切らしながら机に腰をかけほっそりと長い足を組んだ。

「ねえ、最初はね、どうなるかと思うてた。3人目まで私の目的に適応する人間が見つかるかどうか、心配じゃった。」と私の方に体を傾けた。

キララは、混乱していた。何のことを話しているのだろうか？このへんてこりんな格好をして、時代劇のような喋り方をする女の子をつまみ出してやりたかった。

「しかし、始めにこのように最適の女子を見つけられて妾は満足じゃ。」

一息飲んで、勇気を振り絞ると女の子に言った。「あなた誰なの？ いったい、何のことをはなしているのか教えてちょうだい。」

女の子はニツと白い歯を出して笑うと、腰に付いている紫の袋に手を突っ込んだ。手を抜くと、灰のような粉を手に握りしめて唇の前に持ってきた。フツと一息かける。なにやら口の中でごにごにと唱える。

空を舞っていた灰がガラスのかげらのようにきらきらと輝き、やがてもやもやと一カ所に集まる。そこには、きりりと凜々しい眉をして、情熱的な瞳を持つ一人の、一人のサムライが刀を構えて堂々と立ち誇っていた。

「なかなかの賜物じゃろう。魔界で大人気の宗次郎じゃ。」とその男に歩み寄ると恋人のように肩を腕に持たせかけた。

「私の理想の男じゃ。」ふふふと赤い唇をプクンと膨らませて笑った。

やがて宗次郎と呼ばれる男の体がまたもやもやと変化して、一人の男が立っていた。

「先生……」と私はつぶやいた。私のあこがれの先生が私に手を差し伸ばして底に立っていた。

「キララくん」と先生が私を呼んだ。私は、ふらふらと先生に手を伸ばした。あとちよつと、つでとどくところで先生は灰に変わって消え去っていた。

「幻想術って長く続かないのがダメよね。いつつもう八って肝心なところで消えちゃうんだから。」と言った。

「ねえ、ねえ、今のなに？まじ、すごくない?!」と私はその女の子の前に飛びついた。

その子は、自慢そうに机の上にゆったりと体を横たわらせた。

「そなたは、私と同じ姿形をしていても、心は全く子供同然じゃのう。」とゆったりと構えていった。

なによあんだって、さつきは子供のようにはしゃいでたくせに。

「いまのは、幻想術と言ってな、死んだ者の灰を使う術じゃ。灰に微妙に残った魂の力をかりて、現実には存在しない者を幻想として見せることができる。上の上の技なのじゃ。」

「げー、いま、屍体って言ったの？灰が口に残ってざらざらしているような。うう、気持ちが悪くてくらくらしてくる。やっぱりこの子供、気がおかしすぎるよ。」

女の子の顔が突然大理石のように固くなり、ずっと大人びて見えた。

「さて、妾はあまり時間がないのじゃ。さっそくだが、キララ殿、妾と能力交換術の相手になってくれるかな?」

「のうりよくこう?」

「のうりよくこうかんじゅつ。そなたは人間界の者。妾は魔界の者。」

それぞれ持ち合わせている能力が違っており、その能力を交換する術じゃ。」

「わらわはこう見えても、研究熱心な学者でな、ぜひと下界に住んで世界の多くを知ってみたいのじゃ。」と可愛らしい顔を傾けた。「それで、私と交換したいと？」キララはためらいがちに言った。

「そうじゃ」。なんのためらいもなく女の子は言い放った。

「でも、ばれたら？」

「そこは、愛嬌じゃ、愛嬌でどうにか乗り切るのじゃ。」「うう、筋が通ってないよ。無理なこと言ってる。

女の子は、体を起こすと手をパンパンと叩いていった。

「さあ、始めるぞ。」

「え？ちよつと、まってよ。」と言う私を無視してまたもや、腰に手を伸ばして今度もまじないを唱えると、床にぱらつと巻いた。紫色の光が床からはなたれ、床にはあの本とそっくりな魔法円が描かれていた。

「さあ、魔法円に乗って。」といって、私の背中を押して、その魔法円に立たせた。ちよつと、まってよ。これって、夢じゃないんだよね。現実に行っていることなんだよね。魔界になんか送られても困るよ。

「無理！無理だよ。冗談にも程があるよ。」と私は悲鳴を上げながら、魔法円から足を抜こうとした。

「今更、考えを変えろとは卑怯ぞよ。」といってその子が私の体にしがみついて、押さえつけた。

卑怯って、あなたが勝手に話を進めたんでしょ！！

光が二人の体を包んだ。ふわっと体が空中に浮いたような気がした私は気を失った。あたりは闇に満ちていた。私は、フワフワと宙を漂っていた。暖かい腕に抱かれているようで気持ちよかった。だれかが、私の顔を叩いている。

「キララ殿起きなされ。いつまでも眠っている、風を引くぞ。」。目をそっと開くと、私が私の顔をのぞいていた。ひええ、これは夢

かなにか？！

「よかった」私にそっくりで、私の服を着た女の子が私の前にきよとんと座っていた。夢じゃなかったよ。私はのろのろと体を起こした。

「さあ、立ちなされ。術は完璧じゃった。」私は、鏡の前に立つて悲鳴を上げた。あのでんてこりんな衣装を着けて、だるそうな顔をした私が立っていたから。

「しっ！大げさじゃな。あまり、大きな声を立てると死者が気がついて、力を奪いに襲いにくるぞ。」

「さて、試してみるがよい。お前の欲しかった魔法の力ぞよ。」と良いながら私に短い木の杖を握らせた。

「振ってみるのじゃ」

言われるままに杖を振ると、柄先から光が放たれ、狸の時計にぶつかった。ぐによぐによと狸が変化してる。禿げた頭から、よきよきと長い耳が伸びた。可愛らしい歯が二本口元から覗いた。毛色が変わりほわほわの可愛らしい雪ウサギができるはずだった。変化は最後まで終わらなかった。途中で止まってしまったから、みようちくりんな時計が、狸ともウサギとも言えない声を上げた鳴き声を上げていた。

「ひええ、どうしてくれるのよ。パパから誕生日にもらった大切な時計なのに。」唇を震わせて、思いつきりへの字型に曲げると、波が頬を伝い落ちた。

私の格好をした少女はあたふたと慌てている

「泣いてはならぬ、泣いては。魔女は怒りや悲しみなどの負のエネルギーを放つと、妖怪どもが匂いを嗅ぎ付けてやってくるのじゃ。」

「狸が、ウサギが。」と私はさらに激しく泣き出した。

少女は狸ウサギを持ち上げて私の顔の前に突き出した

「これも悪くはないではないか。なかなか、ユニークでかわゆいぞよ。」と

そんなの嫌だよ。「元に戻してよ！！」

少女は、大きな目を伏せて長い睫毛で覆い隠した。

「それができぬのじゃ。」

「なんで、できないの？もう力がないから？じゃあどうするか教えてよ。」こうなったら、しゃくなのでとにかく追いつめてやらねば。「それが、力はお変えに一部だけ与えたので、私にまだ残っている。ただ、その」と出しかけた言葉を口の中に押し戻してしまった。

「責任取りなさいよ。」と私は声を張り上げた。

「その、じつは知らぬのじゃ。忘れてしもうた。」

「どうということなの？」さらにしつこく私は問いつめた。

「忘れてしまったものは思いは出せぬ。お前は私に似て意地悪じやのう。」といった。

私が彼女の近くに歩み寄ろうとすると、彼女は砂袋突っ込み、何やら呪文を唱えた。

足下に前とは違う形の魔法円が光を放った。金縛りにかかったように体を動かすことができない。

少女は私に向かって宣言するように叫んだ。

「そなたの名は今日から百怪ティナじゃ。魔界学校優秀生徒6年生！父はハンサム吸血鬼。母は、生粋の美人魔女。くれぐれも元人間だということがばれないように気をつけるのじゃ。」

足ともの光が強くなり、誰かが足を押さえつけたかのように、体を動かすことができない。

「冗談じゃないわよ。強引すぎる！！こんなのあるえないいいいいい！！」と最後の悪態が彼女に届いたのか、届かなかったのか。とにかく、私は魔法円にぼっかりと開いたブラックホールに吸い込まれてしまった。

Second Candy:イメージと違った魔界

そらきた百夜行のお通りだ

人間どもが腰を抜かして逃げてゆく

こりゃ、ゆかいだ

こりゃ、ゆかいだ

遠くから、気味の悪い歌声が輪唱して聞こえてくる。気がつけば、私の周りには黒い闇に包まれ森が広がっていた。

ずきずきする頭痛をこらえ、木を支えにして、立ち上がった。どちらを向いても、どこまでも闇が続いていた。

ここはいつたいどこか。あの穴に吸い込まれた後、急下降中のジェットコースターのように落下していく恐怖に耐えきれず、私はうつにも気絶しちゃったみたいだ。

あのティナという女の子は本当に魔女だったのかしら。それともドッキリかなにかの撮影だったのかもしれない。そしたら、私はテレビに出演できる。

おまけにハンサムプロドウサーに「君可愛いね。僕のドラマの主人公を演じてみないか？」なんていわれちゃったりして。

キララは冷静に空想に浸った。

目が慣れてくると闇の彼方に、ちろりちろりと光が移動しているのが見えた。どうやらわや師の方に近づいてくるようだ。とりあえず、人がいるようね。あの人に聞けば、ここがどこだかもわかるはず。

やがて、その人影がのろのろと姿を表した。

私は落ち着いてその影を観察した。足が二本。手が二本。体一つ、首一つ、口が一つ、鼻が一つ、くりくりと大きく可愛らしい目が一

っ！！モンスターインクじゃあるまいし。

キララは森中に響き渡る位の声で悲鳴を上げた。これは、きつとドッキリの延長に違いない。特殊メイクかも。最近のテクノロジータツてすごいよね。半泣き状態でキララはモンスターのつるつるした頭を叩いた。

「いやはや、最近のすばらしい技術の発展には驚かされました。」
「むむ、一つ目族の頭を撫でるとは、無礼万全！なにやつじゃ?!」
とギロリと皿のような目を私に向ける。

「これは、落ちぶれ&いたずら魔女のティナどの。ますます許すわけにはいかないぞ！」と言いつつ。白くむき出しの目には怒りで血管が浮き上がっている。

怖い！これはマジで怖すぎます。これはやり過ぎだよ。小学生相手なんだからもつと手加減するべきだよ。

一つ目のお化けはちんちくりんな手で私の腕を掴んだ。

ひあ、気持ちが悪い。背筋が冷たくなって、キララはぶるぶると震えて、その場に座り込んでしまった。

「ごめんなさい。ごめんなさい。失礼をするつもりじゃなかったんです。」とキララは涙を流し懇願して謝った。早く、その特殊メイクの衣装を脱いで人間の顔を見せて欲しい。と心から願った。それにこの合われな姿が全国オンエアになるとおもつといたたまれなかった。

「泣いて誤って、許されると思うておるのか？」一つ目は、意地悪そうに私にくつと顔、というか目の面積が90%を占めているんだけど、を近づけた。

私はぶんぶん顔をつた。不気味な笑みをたたえて、私を頭からつま先まで、ジロジロと目でなで回すように見つめて言った。

「この無礼の罪、体でつぐのうてもらわねばな。」
そうして一つ目お化けは、背を向けさらりと振り袖をずりおろした。その栄養の足りなかったニンジンみたいにか細い背中をむき出しに

した。

そこには、青、赤、緑でその貧弱な背中には似合わないほど、見事な入れ墨が施されていた。

「昔、人間界の北斎殿に彫ってもらったのじゃ。見事だろう。」

「さて、さて、腹もすいていることだし、ガリガリで味家のなさそうだが、その足一つ私に食らわせてくれるのだろうな？」と恐ろしいことを言い出した。

いったい何が起ったのか判らなかつたが、ここで逃げなければ、本当に死んでしまうとキララの感が告げていた。

キララは、逃げた。力を込めて小枝やいばらがむき出しの手足を引つ掻く痛みを無視して、走り続けた。

沢山の光が行列を作って移動して行くのが見えた。ああ、助かった。神様ありがとう！！

ばさつと茂みをかき分けキララは、一本の太い道に飛び出した。

ちょうどキララの飛び出した場所と通っていた行列がキララの方を一齐に見つめた。目、目、目、どこもかしこも目だらけの、百目お化け。首がよきによき首なが女。顔なし、洋梨、一つ目小僧。キララは、妖怪がうようよと行列を作る白夜行のど真ん中に飛び出していたのだ。

「おやおや、こんな所に人間がおるぞ」

「人間ではない、魔女のようだ」

「母ちゃん、食うてもよいか？」

「がたがた子猫の様に震えておるぞ」

どさつと音を立ててキララは尻餅をついた。ぞろぞろ、と妖怪がキララを取り巻き輪を作る。キララはすっかり妖怪に囲まれてしまっていた。

誰かがキララの足に触れた。背中を誰かが押してくる。恐怖にぐりりと囲まれてキララは半分泣き出しそうになっていた。うわーん、誰か助けて。助けてよー。夢なら冷めろー！！

突然、美しい笛の音が闇に響いた。

妖怪達がぎゃーぎゃーと騒いでいる。

「何やつじゃ」

強い発光がすると、妖怪達はその光に恐れを抱き、顔を隠すようにして、地面へと降り伏した。

「おなごの泣き声がしたのでな、ちようと、よって見たら、この騒ぎじゃ。」と美しく甘い声が闇の中から香しい椿の花が開いたようにあたりに鳴り響いた。

キララは、腕で顔を隠しながら、その強い光のする方へ目を向けた。やっぱり、乙女の大ピンチには、素敵な貴公子様が助けにきてくれるのね。と半ばファンタジーの中に出てくるお姫様のごとし、感動で心を震わしていた。

光の中から、白い衣を身にまとい、玉のように美しい貴公子が現れた。はずだった。キララは、この話は私の期待を裏切りすぎると思った。

そこには、猫男が立っていたから。がっくし。

*

赤々と光る唇。ほっそりと下あご。蒼白で美しい頬からは、長く優美に弧を描き髭が伸びていた。そして、宝石のように光を放ちながら輝く二つの瞳、すーっと上に伸びた目尻が切れ目でこれもまた美しく見事だった。

ふさふさと雪のごとし白く女のように長い髪が腰まで伸びていた。そして、極めつけは、頭の上に葉っぱのように敏感にあたりを伺う猫の耳だった。

猫男は私の方に軽やかに進むと、手を差し伸べ立たせた。

あたりの妖怪どもを見渡すと静かに口を開いた。

「このように幼い子供をいじめて恥ずかしいと思わないのかね？」
釜のように長く鋭い爪の妖怪が猫男に飛びかかった。

「おまえには関係ないじゃなの！！」

猫男は眉をひそめると、さっと長い衣を一振りした。釜男が、まるで固い壁にでも当たったように跳ね返され、地面に叩き付けられた。「いたわ、いたいわよ。」とひいひい泣き言をいつている。こいつつて一応男だね。釜男だけに、オカマ？うう、寒すぎる。

どしどしとゾウの様に鈍い音を立て怪物のようにでかい妖怪が一人が群衆の奥から姿を現した。

「呪界ソウ様」

「呪界ソウ様。」と妖怪どもが手を叩いて喜んでいる。

「こやつらが、われわれの行進をじゃましました。」と百本の手を私と猫男に向けて訴えた。

つとどん、

つとどん、

その妖怪は私達の前で足を止めた。天まで届くかのように太い柱のような足が二本私達の前にあった。頭が霧に隠れて見えないほど私達のはるか上の方にあった。

ずらずと体を傾けて、私達に顔を近づけた。丸太のように太い牙が赤く裂けた口からにゅーっと二本ずつ上と下あごから生えている。その口がかつとひらく。キシリトールも効かないほどの口臭が当たりには漂った。あまりのくささに当たりには黄色く見えた。キララは、服の袖で鼻を隠した。

皿のように巨大な目がギロリと私達を見つめる。瞳孔がキューツと縮まって私達をさも馬鹿に下かのように見つめていた。

「これは、これは、猫草子竹蔵どのではないか。」と轟のような声が当たりに響いた。

あれほど騒いでいた妖怪達も引いた水のように静かになり。当たりには、重たい風がゆっくりと木々の間を吹き荒れる音以外何も聞こえなくなっていた。

「我々の行進のジャマをするとは、どういったかぜの吹き回しなのかね。」

猫男はそのなのとおりピンク色した鼻をびくびくと動かしながら返事を返した。

「じゃまするつもりはなかった。ただ、今宵月も美しく、笛を吹いていたら、おなごの泣き声が聞こえた。なにごとかと来てみれば、無邪気な子供を囲んで、あまりにも大人げない行為だと私はおもわずぞ。」

周りの妖怪がぶーぶとヤジを飛ばした。

ふうつと巨人はため息をつくと静かに言った。

「確かに大人げないかもしれない。しかし、行進を乱してこのまま逃すわけにはいかないのじじゃ。我々にもメンツというものがあるのでな。このように未熟な子供に行進をジャマされ、黙っていられないものが多いのじじゃ。」

「それは、承知しておる。しかし、今宵の美しい月にめんじて、許してはもらえないだろうか？」

巨人はまたため息をついた。

「そこにいるおなご、表をみせい」。

おなごって私のことだよ。とキララは思った。猫男に促されて、キララはその妖怪と面とむかった。そこには、手を伸ばせば届きそうなほど近くに大きな牙が刃物のように光っていた。

飛び出した妖怪の飛び出したような目玉がじろと私に向けられた。

「これは、魔族のおなご。たしかカトリーナ殿の娘だったな。」

しばらくの間緊迫した沈黙が続いた。

「おぬしも知っているように、我々、妖怪族と魔族は、あの事件以来ここ数千年の間、休むことなくお互いを睨みつけてきた。どちらかが先に手を出そうものなら、たちまちのうちに全面戦争が始まるだろう。」と重たい声で言った。

「承知しております。だから、ここで手を出すわけにはいかないと。」

「

「そうだ。」

声がかかりと変わって私に向かって行った。

「おい、小娘、今宵はこの男の顔に免じて許してやる。しかし、今度無礼をしたら生きて帰れると思うなよ。」

そういつて、妖怪は、体を引き上げると、お経のような言葉で妖怪達に叫ぶと、背を向けて行進を始めた。周りの妖怪達もしぶしぶと腰を上げると、その後続いた。

猫男がゆっくりと霧の中に姿を消して行く大きな背中にお辞儀をした。

一行の姿が見えなくなると、猫男は、啞然として突っ立っている私に目もくれず、その場を立ち去ろうとした。

「まって！」と私は、猫男の振り袖の裾を引っ張った。

「あの、助けてくれてありがとう。」

猫男は、振り返りキララの目を見つめた。とても、助けてくれたすてきでやさしい勇士様とはほど遠く、氷のように冷たい目。

「おぬしの声が今宵の美しい夜を乱すのが許せなかつただけじゃ。」

さっさと、家へ帰られるが良い。」

キララの目からぼたぼたと涙が落ちた。そんなに冷たい言い方しなくたって。キララは、自分がどこにいるのかも知らないし、この変な世界に無理矢理落とされてしまって、好きでここにいるわけじゃないんだもん。色々な思いが入り交じって涙がどんと流れた。「だって、家どこにあるかわからない!!」

「迷子か。その服装からして都会から来たのじゃろうが、いったいどう迷い込んだのか。まったくのかかる幼子じゃ。名をなのれ!」「き、」といってキララの心の中にあの腹の立つ少女の言葉がよみがえった。

「お前は百怪ティナ。くれぐれも人間だということがばれぬように」「ひゃつか、百怪ティナ。」と震える唇で答えた。

「百怪殿の家の娘か。仕方ないな、タクシーでも呼ぶから、乗って

家に帰るがよい。これきし、このような場所にふらふらと足を踏み入れぬのではないぞ。」と声を和らげ叱るように言うと、近くに生えていた樁の葉を二枚ちぎると、何やら呪文を唱えながら、白い指で葉を擦った。しばらくすると葉が口のように合わさりぱくぱくと動くと思われた。

「もしもし、怪談タクシー会社ですが。」

「住まぬがおなごが一人、白夜行ロードに迷子になってしまった。家に帰りたいので、タクシーを一台送ってはくれないか？」

「承知いたしました。5分ほどでそちらに付くと思います。」といて葉が地面にひらひらと落ちた。

「これで、家にも帰れるじやろう。では失礼させていただきます。」

ここで一人にされてはたまらないとキララは思った。一人、闇の中で待つているなんてこれ以上の恐怖には耐えられない。キララは、素早く白い歯をむき出しにしてとびっきりの笑顔を作ると、大きな目を筋肉の許す限り見開き、きらきらと潤ませ、お願いした。たぶんとびっきり可愛い顔をしているに違いない。

「どうか一人にしないでください。」

「うっ」と猫男は、うめくと、私から顔を背けた。気のせいだろうか体が上下に揺れている。というか、笑いを必死にこらえているようだった。

私は、猫男の袖の裾を引っ張った。

「私の愛らしいお願いに免じて、どうか一人にしないでください。」と猫男と妖怪の会話をまねして言った。

男は私の顔をちらつと見ると、美しい顔を歪めた。

「はっはっは。」と猫男が身をよじってこらえていた笑いを爆発させた。

「おぬしはその顔が可愛らしいというのか？ああ、傑作だ。あの妖怪の一行に混じってても、おかしくないほどおかしな顔だったぞ。」とひどいことをいった。

キララは、突然恥ずかしくなつて、顔を真っ赤にすると、男に背を向けた。そんなにずばつといわなくても。笑わなくなつて良いじゃないの。

猫男は、まるで狂つた猫のように体をあがいて笑っていた。しばらくすると、笑いも治まり、あたりに沈黙に満ちた。ぴー、っひやり、ひやり。

と美しい笛の音が月の光を愛でるようにあたりに響いた。私を振り返つて、猫男を見つめた。月の光に白い衣が光、美しい顔が光、まるで夢を見ているような光景がキララの前にあった。

あんなに気味の悪かつた場所も、今はとっても静かで、キレイ。とキララは思った。

遠くから、景氣の良いかけ声が聞こえてきた。

えっさか

ほっさか

えっさか

ほっさか

走れ、走れ

えっさか、ほっさか

どいたどいた

おカゴが通るぞ

えっさか、ほっさか

二つの光が、上下にはねて私達の方に近寄ってくる。

足の長い妖怪が二人、時代劇に出てくる移動用のカゴを肩に担いで走ってくる。

ああ、また妖怪なのね。もうそろそろ、飽きてきたんだけどな。とキララはため息をついた。

私達の前で、きゅつととまると。愛想の良い声で言った。

「安心、速急、確実の怪談タクシー、お呼びを受け、駆けつけて参りました。」

きちんと宣伝の言葉を忘れていないところがプロらしい。

「さあ、のったのった。」と猫男が私の背中を押すとかごに乗せた。

「いろいろ、ありがとう。」

「気にすることは無い。笑わせてももらったしな。」

キララは猫男を睨みつけた。

カゴが進みだした。キララは、男に向かって叫んだ。

「あなたは誰なの？」

闇の中から、甘い声が聞こえた。

「我が名は猫草子竹蔵。猫族の猫草子家の三男じゃ。」

Third Candy : 魔界のニューヨーク

Third Candy : 魔界のニューヨーク

えっさか、ほっさか

おカゴが通るぞ

道を開け、開け

歌に合わせてカゴが上下に揺れる。キララは膝を体に引きつけると手を巻き付け、頬をおしつけた。

狭い場所は苦手だけど、今は、この空間の狭さが、誰かに守られているみたいで、安心できた。目をつぶると、今までの体験が浮かんできた。色々な出来事が、矢のようにキララを襲っては、通り過ぎていって、頭の中がぐしゃぐしゃだった。いったいこれからキララは、どうなっちゃうだろう？

突然光りが差し込んできた。キララは、開きっぱなしになっている、カゴの窓から外を覗いた。恐ろしかった暗闇が消え、カゴの外には街頭があつた。光は、近づいては強く光り、遠のいては弱くなって、キララの顔を照らした。ちょうど、高速ロードで夜の車を走らせるのと同じように。

不思議な街頭。キララは、目を凝らして、じっと見つめ観察してみた。

燃えるようなオレンジ色をして、まるで、生き物のように光が強くなり、弱くなりリズムをとっている。

まるで、呼吸をしているみたい。

少し上がり坂になったようで、カゴの走る速度が遅くなった。すると、一つの街頭が決められた場所を離れて、御者に話しかけた。

「えらく遅くに、お疲れなこつた。今日はこれで上がりかい？」

前を走る御者が返事をした。

「ああ、今日も一日中、はしりっぱなしだったよ。家に帰ったら、一杯やって、かーちゃんにでも足をもんでもらうかな。」

「そりゃー、いいや。わしは、太陽が東の空に上がるまで、同じところで、浮かびっぱなしだよ。」とゴウゴウとも燃える炎のような男の太いような声が聞こえてきた。

「気をつけいな、この前みたいに、居眠りして、気がついたらお尻が川に沈んでたなんてこちないようにな。」と喋って御者が笑い声を立てた。

「ちえ、そんなにからかって楽しいかい。まあ、いいや。わしは元の場所に戻るぞ。」と怒りを混じらせて、街頭の光が答えた。

元に戻る前に、一度、開いている窓からキララの方を覗いた。炎がキララにやりと笑いかけている。ひええ、もしかして、人魂？キララは、窓から顔をそむけた。もう一度見てみると、どこからは遠くに街頭の光が光るだけで、何もいなかった。

ここでは、街頭の変わりに生きた人魂が街頭をしているんだ。

「見てくれよ、いい景色じゃないか。」と御者が声を上げた。

キララが身を起こして外を覗いてみると、左前方の方に、美しい夜景が見える。

赤、オレンジ、青、緑、紫。カラフルな光が暗闇の中で、縦に広がり、横に広がり、きれいだった。左を見ると、何も無いと思っていた場所には水があった。波が夜景の光を跳ね返して、きらきらと光っていた。

そして、街からはなれた場所に、沢山の光に包まれて、何か大きなものが立っていた。

まだ、キララが5歳の時におじいさんが美術館に連れて行ってくれたことを思い出した。お

「これは、天女の木彫りじゃよ。かれこれ昔の話にな。キララが生まれるずっと前に、実際に、生きていて、天から使いとして人々に愛されていたのじゃ。」とおじいさんは、美しい天女の木彫りを前

にしてそう言った。

水の真ん中に立っていたのは、その木彫りとそっくりの天女の姿だった。目を伏せて、無表情な顔を美しく、小さく閉じた唇はなにか言いたそうだった。

移動しているから？光のせいかな？、なんだか無表情なんだけど、笑って見えたり、悲しげに見えたり、怒って見えたりするな。キララは、うつむいた目をじっと眺めた。とつぜん、目に生命のひかりが、宿ったかと思うと、その目をキララに向けた。青く燃え、怒りに満ちている。キララの腕に鳥肌が立った。

もう一度見てみると、最初と同じように目をうつむけている。目の錯覚かな？

上り坂が終わり、下りに坂になると、キララ達は、街の中へと入っていた。

すごい、すごいよ。いつたいここはどこなんだろう？キララは、興奮して、カゴから身を乗り出して、外を眺めた。

高い建物がひそめ気合い、立ち並んでいた。といっても、ビルのような鉄筋の建物はなく、五重塔の様に和風の建物が何段も積み重なっている。柱は朱色に染まり、人魂や、ぼんぼりに光が灯り、まるで祭りの中にいるみたいだった。ちょうど、ニューヨークのようにビルが建ち並んでいるが、和風バージョンと言った感じだった。

たぶん、夜更けだというのに、あっちこっちから、笛の美しい音や、静かに太鼓を叩く音がして、道は人でごった返していた。道行く人たちは、キララのような格好をして片手に帚を担いだ女の子達のグループ。キツネ人間、狼人間、猫人間や蛙人間。手を取りキスをしているのは、黒いマントを着た西洋の吸血鬼のカップル。

キララは、大通りから目を外して暗闇の続く小路を眺めてみた、真っ暗だったが、誰かいるみたい。

キララの乗ったかごのよこを同じようにカゴが通り過ぎた。ふわりと、たれた布がまくれ上がり、中には美しい着物を身にまとったのっぺらぼうの女が座っていた。

こんなの、だれも見たことないよね。教科書にも載っていない世界。何もかもが新しくて新鮮。もしも元の世界に戻ることができたら、クラスのみんなに自慢してやる。とキララは、わくわくと心をときめかせていた。

そうこうしているうちにあつという間に、キララの家に着いた。といっても、キララがここに来るのは始めてだったんだけどね。

キララの家は、高いビル（和風と呼ぶべきかな。）の街より少し離れた場所にあった。

キララは、ありがとう、と御者に手を振って見送った。あたりの見慣れる光景にもすっぱりなれてしまったようだった。

一呼吸して、後ろを振り返る。朱色に塗られ、太い柱の門が立っていた。中は見えないけど、高い塀が張り巡らされてるし、周りの家に比べると、空高く家が立っていた。

ここが私の家なのね。標識にもしつかりと百怪と書いてあるし。だけど、こんなにどっしり構えられると、なんだか我が家とはいえ入り難いな。とキララは、大きな扉の前で右往左往してどうしようかと迷っていた。

これってどうやって開くんだろう。中から鍵はかかっているらし、さすがに、「開けごま」じゃ開かないよね。

壁を越えることはできないし。やっぱり、一番シンプルなのは、扉を叩くこと。

緊張しながら、手を伸ばして、扉を叩いてみる。コッコツ。しばらく待っても開かない。

もう一度叩いてみる。コッコツ。やっぱり開かない。

今度は、強く叩いてみた。ドンドン。開く様子なし。

誰かいるのか？まったく。

思いっきり足で蹴ってみた。ガシガシ。

これまた反応なし。

ええい、どうしたらいいのだ!!

「姫様、姫様、こちらです。」と声がした。

そちらの方を向いてみると、大きな扉の横に小さな扉があって、そこから一人の少女が手を振っておいでおいでをしていた。

キララは、そちらの方に言った。

少女は、深い紺のシンプルな和服を着ていた。私と同じ位の年。まったくすぐできれいな髪の毛を頭の後ろで束ねて、小さくは真っ赤な唇が花のように可愛らしかった。

「姫様、お早く。おばさまに見つかってしまいます。」

少女は私を招き入れると、あたりを伺いながら静かに床の間に上がった。私のそれに習って、静かに後について行く。

何階上がったのだろうか、もう五分以上怪談を上がり続けている。息が上がって。いい加減、太ももの筋肉が限界に達していた。小学生なのに生意気だって？小学生だって疲れるものは疲れるのだ。だいたい、3階以上はエレベーターをつけるのは常識だと思わない。ねえ、そうでしょう？

「ねえ、まだなの？」つい、愚痴をこぼしてしまう。

少女はふふふと、服の袖で口元をかくして笑った。

「姫様、姫様。もうすぐでございます。いつもは、帚に乗って、ご自分のお部屋に帰られるのでさすがにお疲れの様子ですね。」

くっ、最後の部分は丁寧だが、皮肉がこもっているように聞こえるぞ。

ようやく、階段を昇り終わり、廊下を歩き始めた。少女が角を曲がろうとした瞬間、とっぜん白い人影が飛び出した。

「むむ、ばれたか。姫様、早くお逃げになってください！」と少女が叫んだ。

キララは呆然としてその場に立ちすくんで、飛び出してきた影を見つめた。

おにばば。その言葉がこれほどふさわしい老婆はいないだろう。

白い髪がぼさぼさと伸びあれ、目の回りには、何十にもして皺が垂れ下がっていた。歯は抜け落ち、かっと開いた口の奥は黒い闇に満ちていた。片手にギラギラと光る包丁が握られ、光る二つの目はさらにギラギラしていた。おまけに、角がよきりと生えている。

「葵、わしを裏切るつもりか。」鬼婆がしゃべった。

「姫様に一生お使えすると心に決めております。」と葵と呼ばれた少女も小刀を懐から取り出し、構えた。

二人とも向き合い戦闘モードだと言う修羅場に、キララは、テレビでも見ているようにぼぱんとつつたっていた。

おぎゃぎゃぎゃ、と世にも恐ろしい声を立てて、おにばばが葵に襲いかかった。その顔の恐ろしいこと、恐ろしいこと恐ろしいこと。

キララは、気絶するかと思った。

しかし、葵はすつとよけると、その場に仰向けに鳴ってぱたりと倒れてしまった。やはりあの恐怖に耐えれず気絶してしまったようだ。「小娘が。私にかなおう何ぞ1000年早いのじゃ。」と鬼婆が、ハンサムに勝ちゼリフをはいた。

こうなったら、ぼけつとしている場合ではなかった。鬼婆が、じりじりとこちらによつてくる。おまけに、片手に包丁を持って。

「姫様、姫様。うらめしゅうございます。」と笑顔を浮かべる。また、その笑顔が意味ありげで恐ろしい。

「せつかく父上様、母上様が、姫様を心より想い、殿方探しのパーティを開かれたというのに、ほつぽり出して、逃げてしまわれて。うらめし、うらめし。」といて服の袖で涙を拭う。

「おまけに、門限の時間になっても帰ってこられない。ばあやである私はどれほど心配したか。うらめし、うらめし。」と言った。

「あのさ、ほら、えーと」とキララは口に出してみたものの、何も思い浮かばない。

「いいわけするおつもりか！」と突然おにばばが怒った。

そして、即座に私に牙をむけて襲いかかった。あの恐ろしい顔をして。いくら勇者と言えどあの顔の恐怖に耐えられるわけがない。というところで、キララもその場にキューンと倒れてしまったのであった。

キララがこのへんてこりんな世界に迷い込んでから一ヶ月が経っていた。

キララは、机に肘を立ててほおづえを突きながら、窓の外を眺め考え事をしていた。

もう、一ヶ月も経つのに、未だに元の世界に帰る方法が見るからない。パパもママも心配しているんだろうな。クラスのみんなも先生も。

キララはこの世界では、百怪ティナとして存在していた。

「ティナは実は、人間です」といえば、元の世界に返してくれる方法を教えてくれるかな？

だけど、ここに住むものの多くが、人間を嫌っていた。ちょうど人間が、妖怪や魔女を嫌うように。

だから、今は、百怪ティナの仮面をかぶってしよう。この世界は弱肉強食だから、まだきちんと自分の身を守ることでできないキララには、危険な告白になるかもしれないから。

それに、キララは、この世界が嫌いじゃない。

「ティナ、ティナったら、先生が呼んでおるぞ」と私の後ろの、ろくろ首の女の子が私を突つついた。

しまった、授業中だった。そう、この世界でも学校というものがある。

今キララが受けているのは、魔法史。

学校では、基本的な教科の他に自分の能力に合わせた教科を選ぶことができる。ここの街が発展する前は、決まった教科しか受けられなかったのだけど、街の発展と共に様々な国から色々な族が集まったため、教科を増やしたんだって。

例えば、悪魔は悪魔科という専門の科目がある。よぼよぼのメフィストという悪魔が、主に人間のたぶらかし方、悪魔の契約の仕方

などを教える。音楽のクラスでは、毎回、恐ろしい悪魔の歌声が校内中響き渡り、苦情の声があまりにも多かつたため、教室が校内の隅にある小屋に移された。悪魔が何十人もクラスに集まるので、なんだかそのクラスだけ校庭の隅でいつも、どんやりと暗いオーラを出している。建物の上にはいつも黒い雲が渦巻いて、天気予報では、いつも曇りか雨の予報しか出ない。

もちろん、能力があれば、天使だって悪魔科を受けることができる。

私が取っているのは以下の教科。

書道：教養。主に漢字を習う。ルーンや古代エジプト語など魔法の力を持つ古代文字も習える。

占い：カバラ、タロット、水晶など人間界でもポピュラーな占いを習う。占い専科では、宇宙や自然などの声を訊いて、因果関係や未来、真実などを知ることができる。

天文学：星の動きの観察。

歴史：世界史、日本史、魔術史。

武術：刀や長刀、弓矢、馬術など戦いに必要な術を習う。

魔法術：私の家系が魔法系のなので必要。魔法陣や飛行方法、ステイツキの振り方、薬草学や

前の学校なんか比べて、授業がものすごく楽しい。毎日が新鮮で、常に新しい記憶で頭をいっぱいにする。それが、幸福感になるなんて思ってもいなかった。朝だって目覚ましよりも早く起きるし、学校に行くのも楽しくてたまらない。

昼休みの鐘が鳴った。そろそろと、みんな外に出て行く。

キララも席を立ち、教室から出ようとした。誰かがキララの肩をトントンと叩いた。

腰まで伸びて大きくウェーブかかった金髪の髪と、ブルーアイを持つ女の子が立っていた。白鳩のようにきれいな翼が背中から生えて

いる。

「ていなちゃん。お昼と一緒に食べようよ。ね？」と口をこぼして笑って首を傾げる。

この人形のように可愛らしい女の子は、天使族の白衣うらら君。数少ない天使族の一人で、私のクラスにはこの子一人だけしかない。

「今日はね、天使科でね。お弁当みんなでたべようってね。でね、ティナちゃんも、誘ってもいいかなって、みんなに訊いてみたらね。それは良いアイデアだって。だから、一緒に食べようよ。ね？」とゆつくりと大回しな喋り方をする。この子の周りにいると、なんだか癒されると言うか、不思議なオーラに影響されてのほんとした雰囲気になってしまふ。じれったい時もあるんだけどね。

「本当に？やった。私、一度天使科行ってみたかったんだ。ありがとう。」

天使科は、この巨大学の最上階にあった。私はふうふうといいながら、階段を上っていた。

「毎日、ここ登ってるの？だいたいね、天使は翼を持ってるんだから、空を飛んで行けば良いのに。」と私は悪態をついてみた。

「うふふ、飛行は、授業以外では禁止されているもの。毎日登っていれば、お散歩みたいでたのしいよ。ティナちゃんも天使科にはいれば、毎日階段登れるよ。」と余裕の口調。

「うーん、階段登りたくて天使科に入りたいと思うのは、うららかなぐらいだよ」と突っ込んでみたんだけど、「ていなちゃんは、面白いこというのね。」と天使スマイルでさらりとかわされてしまった。

「そういえば、ていなちゃん最近すごく、変わったよね。」とうららが話を変えた。

「そうかな、どう変わったと思う？」と聞き返してみると、面白いことが分かった。

「あのね、ていなちゃんはね。前は、すごく話し難かったの。いつ

もいたずらばかりしてて、遅刻の常習犯だし、よくものは壊すし、いつも成績が悪いの。」と痛いことをずけずけと言ってくる。

「でもね、最近は、はなしやすいの。うらはは前からティナちゃんと話したかったから、お友達になれて幸せなんだ。」と可愛いことを言ってくる。

まあそんなことを話しているうちに、ついに最上階にたどり着いた。扉を開くと、太陽の光に白い衣が反射してまばゆいばかりに明るい教室があった。

「みんな、ていなちゃんつれてきたよ。」とうらが私を紹介すると、金髪の女の子が近づいてきて私の手を取った。そして、金髪の女の子が近づいてきて、左手を取って。そして、金髪の…オール金髪だった。確かに天使のイメージといえばブロンド、ブルーの瞳、ホワイト衣つてところ何だけど、男も女も人形のようにみんな同じ姿をしている。

「ていなちゃんはじめまして」

「うふふ」

「こんにちは」

「きてくれて、ありがとうね。わたしも前からね、ティナちゃんとお友達になりたかったんだ。」とみな「うららオーラ」を放っていた。うららの天然ぶりは彼女特有の性格だと思っていたのに。一族全体の性格だったとは、どの聖書にもセラピーブックにも記されていない真実と言ったところだろうか。まあ一応、天の使い、メッセンジャーなのだから、「天使は、実は天然ぼけで、のんびりしすぎています」などは口が裂けてもいえない秘密なのかもしれない。

机や椅子などが端の方にがたがたと片付けられ。教室の中央に、鮮やかな緑色の敷物が敷かれた。暖かい太陽の光りが教室を満たし、お弁当まで広げられてピクニックみたいに陽気な雰囲気になった。いつか、自分の世界に帰ったら、これを教室でやろうとキララは笑みを浮かべた。キララは、空っぽの胃に両手をすりあわせながら、「お代官様、もう少してコレにありつけますよ」とごますりをした。

「ていなちゃんはおべんとうなにもつてきたの？」とつらら君が訪ねた。そう、とつても嬉しいことに普通の食事をする事ができた。もしも、イモリのしっぽやら子羊の心臓などと言う珍味が一般的な食事内容であれば、とてもじゃないけどキララはこの世界で生きてゆけないか、絶望して残酷な革命家になったに違いない。

「えーと、今日は、葵くん、お手製のサンドイッチだよ。」とお弁当のふたを開けると、ほわほわのパンに挟まれて美味しそうなサンドイッチが顔を表した。

「うわー、いいな、おいしそうだね。あおいちゃんつてだれなの？」
「私の家で働いている、メイドさんだよ。」

「そうなんだ、いいね、誰かに作ってもらえるなんて。」

「君は、自分で作ってるの？」

つらら君は、少し顔をうつむかせると、一瞬何か考えているようだった。すぐにその考えを振り払うように笑顔で言った。

「そうなの。自分で作るのって楽しいんだもん。ねえ、良かったら交換しようよね？」

そういえば、天使って何を食べて生きているんだろう。天使の生活事情については、あまり知られていないなとキララは思いながら、つらら君のお弁当を覗いた。

可愛らしいおにぎりが、六つ。

「へー、普通のもの食べるんだね。」ときららは ある意味がっかりしながら言った。

「うん。ふつうのも食べるし、神様の食べ物もたべるよ。」

「へえー、その神様の食べ物って何？」

「あんぶろしあ、それからねくたー」

「は？」と私が聞き返すと、隣のすこし年上の見事なエンジェル・チークをした男の子が笑いながらつらら君の変わりに答えてくれた。
「アンブロシアとネクターのことさ。前者は、神々の食べ物で人間が食べると不老不死になれる。後者は、神々の国で取れた花からとれた飲み物で、同じく不老不死になれる。どちらもほっぺたがおち

るほどおいしんだよ。」

キララの脳裏にうまい儲話がよぎった。それを人間に売りさばいたら、キララはちょー金持ちって感じい。早速、どこで購入できるか聞こう。

「キララちゃんにもたべさせてあげたいんだね。」
うんうんとキララは目を輝かせて、体を前に出した。

うららと男の子が顔を見合わせると、にっこりと笑みをかわした。「たしか、外務省条約で、神国からの輸出および、下界への輸入を禁止するものとする。条令を破ったものは、直ちに死刑。」と男の子が楽しそうに言った。

ちくしょー。やっぱり、そう簡単にお金が入ってくる分けないよな。ああー、がつくしだ。さすがに、密輸とかはやりたくないしな。

「やっぱり、くやしそうだね。」とうらら君がいった。

「え？」

「だってね、みんなこの話をするとお金儲け事を考えるんだよね。」と男の子に言った。

「もう、期待だけさせておいて、ひどいじゃないか。ティナは、摩天楼のてっぺんで葉巻すつてる女社長までイメージしてたのに。」とそっぽを向いて、口を尖らした。

「ふふふ、ていなちゃんってやっぱりおもしろい。」とうらら君が笑いながら私の体に腕をまわしながら抱きついてきた。

「うららのこと嫌いになった？」と大きな瞳をうるうるさせて、見つめてくる。この無垢な表情。まさに天使。

これが、本物の愛嬌のある目力かといつぞやの猫男に私が向けた顔のことを考えながら、私は笑ってしまった。

「どおして、わらうの？」とうららが真剣なまなざしで訊いてきた。「ティナ様をだました罪は、重いからね。くすぐりの刑だ。」といつて、うららに飛びつくと、思いつきりお腹をくすぐってあげた。

「ひえ、ーうら、いやーくすぐりたいよ。ははは。やめてったら。」

周りの子が、うふふ、なにやってるのかしらと面白そうに私達のことを見ていた。

*

とんとんとーん。

キララは、鞠のように軽く階段を駆け下りていた。下りつてなんて楽チンなんだろう。キララは、大空を羽を広げ気持ちよく下る大驚なのだ。お昼ごはんも腹いっぱい詰まっついてキララは陽気な気分だった。

最後の段を思いっきり五段飛び降りると、真っすぐ伸びた廊下を走り出した。太陽の光を右頬に浴びながら、時々来るくると回ったりもした。ここに、来て始めて素敵な友達ができた喜びでいっぱいだった。しかも、天使だ。

そのまま、他の厩舎に行くために、扉と飛び出すと、つんのめりながら急停止。左側にちよつと陰険な小道が見える。たしか、ここを通ると近道だつてうらくくんが言っていたな。

あまり草の生えないその道をキララはゆつくりと歩き始めた。「べぞべそするんじゃないよ!!」とどこからは女の子の声が聞こえた。

気のせいかなと思いつながら、さらに進んで行くと、横道のところで女の子達が三人固まっていた。丈の短い振りそでを来て、短いスカートから長い足がにきつと生えている。ちょうど私と同じ格好だったけど、もつと肌の露出度も高いし、両耳から大きなループのピアスをしていた。たぶん上級生の子達だろう。

長い足で何かを蹴飛ばしている。そのしたにもぞもぞと生き物が。うめき声を上げると、逃げるように体をよじらしている。顔が見えて、切れた唇から血が流れていた。

キララは、背筋がぞくぞくとして、心がちくちくと痛んだ。これ

って、もしかしていじめ？

一人の女の子が倒れている生き物、男の子の胸ぐらを掴んだ。髪の毛が頭の後部で、ツンツン四方に飛び跳ねている。

「とつとと出しやがね。よもや、もってないよは言わせないぞ。」

「…」男の子が何か女の子に言ったらしい。キララの耳には聞き取れなかった。

「じょーだんじゃねーぞ。約束破ったらどうなるか分かってるんだろうな。」と男の子の顔を殴ろうとした。その瞬間、男の子はさつと体を翻すかと思うと、逃げ出した。

女の子の一人が、袖から、魔法棒を取り出すと、何か唱えながら棒の先で小さな円を描いた。その円が円盤のように男の子の足に飛んで行つて、絡み付いた。

痛々しい音を立てて、男の子が地面に放り出されるようにして倒れた。その倒れた頭に女の子が足をのせた。

「にげられるとおもつたの？馬鹿みたい。」と真つ赤に口紅を塗り立てた唇の下から低い声が聞こえてくる。

なんて、嫌なやつなんだろう。キララは、体が熱くなるのを感じて、拳をぎゅっと固めた。

「姉御、この野郎逃げよう。どうしますか？」

男の子がおびえて、泣き声を上げる。

「つかえないな。このやくたたずが。」と言って足を上げると、男の子が、おびえて、壁の方へと逃げた。がたがたと恐怖で震えている。

「やっちまいな。」とその女の子が言つて背を向けた。

他の女の子達が、男の子ににじみよる。

「やめなさいよー！」気がつくくと、キララは、その男の子と女の子の間に立ちはだかつていた。茂みのところに落ちていた木切れを手に持ち構えた。

「3人で一人をいじめるなんて最低だと思わないの？」

「お前何もの、私達のじゃまをするきか。」

「その、じゃまをするつもりよ。」と私は大声で答えた。

「下級生のくせに生意気な。」とって、女の子が飛びかかってきた。キララは、めちやくちやに木切れを振り回した。バシ。

「痛ってなー。何するんだよ。」とって私に飛びかかってきた女の子が顔を押さえて、後ずさりをした。もろ顔面に直撃したらしく、足下がふらふらとしている。

隣にいた女の子が、それをみて、私に飛びかかってきた。まあ、適当の命中率って低いものよね。

キララは、その女の子の体ごと壁に叩き付けられた。痛みに力が入らない。喉に冷たいものが当てられていた。きらつと光る小刀。キララ一世一代の大ピンチだった。

女の子が冷たい笑みを口元に浮かべると、刀を高く上げた。私は目をつぶり顔を背けた。殺される。

「やめな。」と背を向けた少女が命令した。

「あんた、この男の子助けたいと思ってるんだろ。」と訊いてきた。

「もちろんよ。」冷や汗が米から流れる。

「じゃあ、私の欲しいものを取ってきな。」

「姉御、なにいつてるんですか。」と青い着物を着た女の子が言った。

「だまん、このバカ男はもう役に立たん。」とってその男の子をギラギラと睨みつけた。

「あんた達何者なのよ。」とキララは訪ねた。

そのリーダー核らしい女の子の周りにさつと二人の女の子が右と左に立つと、ポーズをとった。

「我らは華園組。」と三人合わせて声を張り上げた。まるで、宝塚の舞台を見ているようだった。

「華園組リーダー・疾風の炎、お菊」と赤い服を着たセンターの女の子が、あごを上げて腕組みをした。

「同じく華園組の右手、桜吹雪のお花」とって緑の服の女の子の

腕組みをする。

「そして、左手、濁流の錦、おミヨ」と青色の衣装の子も腕組みをした。

キララは、ぽかんとしながら、立ちはだかる女の子達を見つめていた。わかったような、分からないような。

「で、キララは何をすればいいの？」

「早乙女コリュウとキリュウから魂従球を取ってこい。」と挑戦的に言った。お花とおミヨがさも馬鹿にしたように、笑っている。

「誰それ？それにそのなんとかだまってなに」

「姉御、こいつ、そんなこともしらないんですぜ。」

お菊は、お花を静かにさせると言った。

「お前、確か、百怪家の者だったな。いくら大金持ちの姫とはいえ、こんなことも知らないなんて、落ちぶれた者だな。」

「なによ、あんた達にそんなこと言われる筋合いはないんだから。」と痛みを抑えて立ち上がった。

「おやおや、その役立たずを助けたかったら、おとなしくしてるんだよ。」

キララは、後ろで震えている男の子に目をやった。ふう、しかたないか。

「私が、そのなんとかを取ってきたら、この男の子をこれ以上いじめないって約束してちょうだい。」

「それは、取って来れたら、言うセリフじゃろう。」三人は、私達に背を向けて立ち去って行く。

「まあ、せいぜい期待しているからな。」

高い笑い声が、狭い空間でこだまして、やがて空へと消えて行った。「ねえ、大丈夫なの？」とキララが男の子の方へと屁を差し伸ばした。だけど、あれ、いなくなってる。もう、なんてやつだろう。女の子に助けてもらったうえに、さっさと逃げ出すなんて。

「ばかやるうー。」きららは、空に向かって大声で叫んだ。

Fifth Candy ; 初キスの予感

武術のクラスが始まろうとしていた。キララが急いで体操服、侍の服装みたいなのに着替えて、木造の稽古部屋に入ると、履物を脱いで一礼した。20人ほどの生徒が集まって、壁のそばでお喋りしたり、男の子達が、棒を振り回して戯れたりしている。

一口の目の前の壁には、「千里道一步」と書かれている。キララの姿を見つけたるくる首とその周りの女の子達が、私に手を振っている。

「ティナ殿遅いではないか。」とろくろ首がキララのところまで、にゅいーんと首を伸ばして言った。このちよつとぼつちやりめのろくろ首は、首美お乱。頭を江戸美人スタイルにして、いつも派手なかんざしでバツチシ決めている。食いしん坊の彼女に知らない料理はない度のグルメである。

「いやね、ちよつと野暮用があつてね。」とキララはあのいじめのことを話そうかどうか、考えていた。

「我ら、殿方のことについて話しておつたのじゃ。」と蛙女が私の目の前に飛んできた、蠅をぱくつと口を開けて、舌ベロで捕獲しながら言った。どこの世界でも、恋話だけは、永遠につきることがないのねー。

「で、誰が一番ホットか考えてたわけー。」とNYギャル風のムツチな悪魔が、くるくるに巻いた金髪の髪の毛の先をもてあそびながら言った。

「で、キララ殿は、誰が一番の殿方だと思う？」とお乱が、私の体に首を巻き付けながら訊いてきた。

「ええ、私あまりそういうの興味ないしなー。」お乱の首を外しながら答えた。

「また、また、一人位いるんでしょう？ゴシップなしは禁則だぞ。」とムツチが言った。

「いやだな本当にいないんだっては。」

「まあ、良いわ、私達は、早乙女兄弟がやりやりだと思っただけ、ティナどう思う？」

「その事なんだけど、早乙女ってだれなの？」とキララは、あのいじめについて考えながら訪ねた。

「ええええ？」と女の子達が顔を見合わせながら、驚きの声を上げた。

「あんだ、早乙女を知らないの？あの、いとも美しい美少年を。」

「ちよつとティナあんた熱でもあるんじゃないの。」とお乱がぐぐつと顔を近づけてきて、私を抱えると、おでこに手を当てた。

「いや、知らない者は知らないの。」とキララは口ごもりながら言った。

きゃあ、と女の子の黄色い歓声が入り口の方から上がった。キララはお乱の太い腕に抱きかかえられながら、歓声の方角に顔を向けた。一人の悪魔の少年が入ってくるころだった。

女の子達が、明らかに色目を使って体をくねらせている。しかし、それほどまでにきれいな顔の少年だった。私の世界で言えばジャニーズね。長身なうえに軽く筋肉のついた若々しい繊細な体つきがまぶしかった。髪の毛は漆黒のように、恐ろしいほど美しい切れ目の瞳や首元に垂れ下がっていた。背中からは、コウモリのような翼としっぽが生えている。だけど、なんだか気に入らない。誰一人にも挨拶しようとしてもしないし、人を馬鹿にしたように、周りの女の子にも目を向けようとしていなかった。

「ティナ殿、ティナ殿、早乙女の弟君じゃ。」と興奮して私の体を揺さぶってくる。

やつが、私達に近づいてくると、ムツチは、大きな目で明らかに好き好きオーラを出して、手を振る始末だし、蛙女は興奮のあまり倒れるし、私と言えば、お乱が突然手を離れたので、地面に叩き付けられてしまった。

キララは、痛む腰を押さえながら、立ち上がると、その少年に目

をやった。少年を取り囲むようにして、女の子達が集まっている、それでも、話そうとも、目を向けようともしなかった。

嫌だな。とキララは思った。鼻につくやつに頼み事をするほど、嫌なことはない。だけど、約束は約束だし、あの弱虫な男の子を助けるためだ。私ってなんて良いやつなんだろう、キララは、正義感に酔いしれながら、早乙女に近づいた。

女の子の群れをかき分けて、真つすぐと彼の前に立った。明らかに、話そうとしているのに、向こうにそういう意志がないことにキララは腹が立っていた。

「あんた、早乙女サリュウでしょう。私に、靈魂玉の玉ひとつくれない？」と大声で手を差し出しながら言った。

あたりが、しーんと静寂になった。みんなが、固まっている。視線がキララにそそがれた。あれ、あれ、私何か悪いことでも言ったかしら？ときよるきよると潜水艦の望遠鏡のようにあたりを見渡してキララは、戸惑っていた。靈魂玉ってなんかのアクセサリーの事だよ。

お乱が私のところに重たい体で駆けつけてくると、そのばかり引きずりだして、隅の方に連れて行った。

「テイナどの、気でも触れたのか？」と訊いてきた。

「靈魂玉ってピースのことでしょう？」

「なにを言っておる。靈魂玉とは、生きる者の魂の一つ。その手に入れ方は、」お乱は、顔をまっかにして口ごもった。

「入れ方は？」

「相手の方と、相手の方と、せつぷ。」と最後の言葉を濁らせた。

「え？」

「接吻しててにれることができるのじゃ。」

「せつぷん?!」と私はストトンキョンな声を出した。

せ、接吻ってキスのことだよ。じゃあ、キララは、見ず知らずの少年に、しかも大人気に、キスをしてくださいと頼んだって事？ああー、気が遠くなりそうだ。キララは、頭を抱えて、その場にしゃ

がみ込んでしまった。思春期の女の子が男の子にそんなことを訪ねるなんて、しかも大声で。恥ずかしい。穴が入りたいとはこのことなんだわ。

それから、その日一日中、校内は「靈魂玉」の噂で一杯だった。噂の感染率の高さにはいつも驚かされる、靈魂玉の話は、ものの数分の間に、強力な感染菌の様に学校中に広まったと思うと、様々な形でささやかれた。キララは、一日中うつむいた。靈魂玉の名前がささやかれるたびに、顔を真っ赤にした。おまけに早乙女ファンクラブ通称、SFCから嫌がらせを受けたりもした。うう、しかたないじゃないか、キララは何も知らなかったのだから。

しかし、そんな地獄の午後の終わりを告げる鐘が鳴った。キララにとつてその鐘の音は、救いの手だった。助かった。我一番と、一目散に教室を飛び出そうとした。

だが、扉の外には、黒い影がそこに立っていて、止まる暇もなくキララの体がその影にぶつかった。

「いてて、だれだよ。まったく」といって、悪魔の少年がキララの胸に顔をのせていた。

ぎゃあ、とキララは一声うなると、男の子をばしばしと、ほうきの柄で、叩き付けた。

「この、スケベやろう!」

「おい、やめろよ。そんなに荒れるなって。」とつて、私から離れる。

「お前、靈魂玉の魔女だろ?」

「それが、何なのよ!」といつて、ほうきの柄を握る手に力が入った。

「いや、面白いなと思ってさ。おれ、あいつの親友のマトロウだ。」

「はあ、それが何か?」

「そんなに怒るなって、靈魂玉欲しいんだろう。どうだ、今度の棒術の実践大会で、こいつと戦って、勝ったら靈魂玉をやるって言うのは?」と言つて、誰か、そこにいる者の肩に手を回した。それが、

あの、早乙女あったというのは間違いないだろう。キララは、顔を真っ赤にしてうつむいた。

「な、こいつは、いやだつて行ってるんだが、俺は面白いからやつてもらいたいと思う。」

それつて、あなたの楽しみのためかい。

「いいじゃんか、何も失う者はないんだし、こいつの靈魂玉つて言ったら、学校運中の乙女諸君が喉から手を伸ばすほど欲しがってるんだぜ。こいつが嫌がろうが、そのチャンスが今お前の手に飛び込んできたんだから、断るのはもつたないぜ。」

「そんなの、絶対にいやよ。」とキララはきつぱりと断った。そこまで、私がかんばる理由つてあるかしら。それに、勝つてもあいつとキスなんかして手に入れるなんて、まっぴらごめんだ。キララは、きびすを返すとその場から去ろうとした。

「だけど、あいつを助けるんじゃないかったのか？」

「あいつつてだれよ？」

「あの、3人の恩あの子にいじめられてひいひい言つてたやつ。」

「なんで、あんたがそんな事知ってるのよ。」

「わるいな、面白そうだったから見物させてもらったよ。お前、面白かったな。ほつときゃ良いのに。」

「あんたには、関係ないでしょ。」

「でどうするんだ、やるか、やらないか。やらなきゃ、あの子がまたいじめられるんだぜ。お前は、そんなに冷酷なのか？」とキララの人情をせめて来る。

「やるわよ、やればいいんでしょ!!!」

ああ、これでもう引き下がれない。

「それでこそ、お前らしいよ。じゃあ、契約成立な。ここんところにサインしてくれ」といつて、契約の紙を差し出す。キララは、渋々とサインをした。

マタロウは、早乙女の後を追いかけてながら、遠くから私に叫んだ。

「お前の胸真つ平らだな、ちゃんと喰ってるのか、そんなんじゃない、

男
できないぜ。
」
ウギヤア、むかつく。

S i x t h C a n d y : 靈魂玉をかけて

時は朝

こちらは東

後光輝く太陽を背に、

敵も目くらみ、立ちくらみ

我が手の勝利もまじかなり。

というわけで、ついに決戦の時を迎えた。運命の鐘が早鐘を打つ。若いギャルを後ろに控え、キララ大将、頭に八チマキ。心にたすきを携え、手が白くなるほど強くぎゅっと武器を握る。対する敵に、ギンギンと殺意の視線を送くる。やつもひるんで立とうとしない。勝てるかもしれない。キララは心の中で笑みを浮かべた。

キララの目が充血しているのは、けして睨みつけすぎた、というわけではなく、緊張のせいで昨日眠れなかったからである。

後ろでは、共に涙を流して稽古を積んだきた、お乱、蛙女、ムッチが身じろぎもせず、静かに私の背を見つめていた。皆の心は、一つに思いを寄せていた。それは、早乙女・弟の靈魂玉を手に入れること。

「ティナ殿、お前は狼じゃ。冷酷で血に飢えた、野獣じゃ。」とお乱が、私のたすきを直しながらファイトをかけた。

「そして、猿じゃ。ずる賢さで敵を欺く。」と蛙女が、私の棒を磨きなら言った。

「そして、鳳凰。相手を骨の髄まで燃え尽くす。」とムッチが私の髪の毛を直しながら言った。

まあ、これが、奴らの心理強化の作戦らしい。キララは、半ば、あきれながら毎日放課後に2時間のメンタルトレーニングを受けていた。

しかし、馬鹿にしたもんじゃない。キララは感謝していた。この

作戦は正しかった。今、キララの心は、冷酷で、ずる賢く、燃え盛っていた。全身に熱い血が流れ、興奮して五感が高まっている。あたかも風がキララの勝利を確信させるかのごとく、後ろ風を吹きつけてくる。そんな気がしていた。

で、対する敵と言えば、椅子に座ったまま、つまらなそうに、そっぽを向いたままである。自らを守る筈の武器も床に置かれたまま。気にくわない。キララの闘争心の炎が油でもそそがれたかのように燃え上がった。

「そろそろ、始まるぞ。」とお乱が私の肩をもみながら言った。

「お前は野獣じゃ。忘れないでね。」とムツチが耳の中でささやいた。

審判が、合図をした。「両者とも所定の位置に着くように。」

早乙女が、棒を持ち上げると、だるそうに、棒を肩に担ぐと、前に進んできた。しかし、眼中にキララは入っていないようだった。

キララは、鼻息荒く、所定位置にどかどかと進むと大魔王のごとく構えた。

しかし、よく考えてみれば、これは小学校の実践大会である。なんでここまで気合をいれてるのかな？もしかしたら、キララはのせられやすいタイプなのかもしれない。お乱達にのせられて、ここまで来てしまった。まあ、いまさら気がついても遅いんだけどね。

「おい、貧乳。がんばってるか?!」と観客席から、大声でありがたくもない応援の声が上がった。驚いて観客が、ぶんぶんと両手を振り回している馬鹿男に顔を向けた。お分かりのように、あのスケベ男である。さっきから全然見えないと思っていたが、今頃になってかけつけてくるなんて、本当に早乙女の友達なのかしら。

「令」と審判が告げた。キララは、体を傾けた。これが本番なのだ。もう後戻りもできない。棒を握る手が強くなる。

審判が片手をすーっと上げると、勢いよく振り下ろした。「はじめ！」

タアッ、キララは跳躍すると、早乙女の頭に棒を振り下ろした。

棒の先は、空を切り、地面に着地したキララに第一の攻撃が襲いかかった。固い木と木が衝突して、二人の間に一瞬視線が交わされた。押されるようにして、下にいるキララは、ぎりぎりとも相手の矛を押し戻すと、さっと体をひいて、早乙女からはなれる。

そう、試合のルールを説明しておかなくちゃね。キララは、右へ左へと攻撃をかけた。相手の矛先がキララの頬をかすめる。

まず、この大会では魔法は禁止。あくまでも、棒だけを武器として戦うこと。キララは、くるりと体を翻して、早乙女の一撃を交わすと、逃げるようにして、場内を駆け抜けた。ようは、先に相手のど元を乗った方が勝ち。キララの欠点は、守りが弱いこと。だから、なるべく離れていて、一瞬の隙を狙う。

早乙女が、すぐに追いついて、キララの横に並んだ耳元にはバサバサと着物の裾が風にはためいている。二人の後ろには、埃が舞い上がり、長い線を引いている。

だけどね、やっぱりね早乙女の方が足が長いのだ。すぐに回り込みをされて、キララは、まともに向かい合うしかなかった。激しい攻撃に、キララは交わすだけで精一杯で、じりじりと後ろに下がるしかなかった。息も上がってきて、一息一息が苦しかった。

「おい、りゅうや、兄さんつれてきたぞ」とあの大声が聞こえた。一瞬早乙女の、棒が止まる。今だ！キララは、棒を思いつきり体に引きつけると、早乙女に飛びかかりながら、右から左にかけて、空気を切りながら棒を振りかざした。早乙女の驚いた顔が見えた。勝てるかも。

無我夢中だった。だけど、気がつくともキララの体は地面の上に倒れていて、目の前に矛先が突きつけられていた。

あーあ、やっぱり負けちゃったのか。仕方ないよね、始めて棒を握ってから1ヶ月で、小さい頃からずっと練習してきた者に勝てるわけがないもの。だけどね、なんだか悔しい。なんのかんの文句を言いつつ、なれない世界にも、練習にも一生懸命だったもの。ここで勝てたら、なんだか、この世界で認められるような気がして

たから。

キララは、腰を上げると、何も言わずに場外から退場して行く早乙女の後ろ姿を眺めていた。

お乱達が、駆け寄ってきて、私の肩を叩いた。

「ティナ殿、すごくかつこよかったぞ。」

キララは、かすかに笑うと「ありがとう。でも、負けちゃったよ。」

「だけど、戦っているときのティナの顔にドキツとしたよ。」とムツチーがまだ、ハアハアと呼吸をしている私の体を抱きしめた。

私は、ムツチーから離れると、棒を振り回して言った。「私すごかつたよね？かつこよかった？」。

うんうんとお乱達が私に拍手を送った。

「負けたくせに、やけに、元気じゃんか。」と誰かが、近づいてきた。変態男だ。

「うるさいわね。あんたには、関係ないでしょ。」と私は、やつの鼻先に棒を突きつけた。

「おっと。あぶねーな。せっかく友達を紹介してやろうと思ったのに。」と棒を指で押しつけながら、私に、顔を近づけて、頭の上に手を置いた。

「なによ。気持ち悪いわね。」キララは、顔を背けた。

「あれ？大雨警報じゃんかなくなくな、洪水起こす気か？」

キララが押し黙っていると「ほら、早乙女の兄。」といて、一人の男の子を私の前に押し出した。

えええ？キララは、あんぐりを口をあけたまま呆然と立ちすくした。黄金の髪の毛が早乙女弟とそっくりの顔をフワフワと包んでいた。背中は、きれいな白い羽が生えている。そっくりの目には、早乙女弟の冷たい光はなく、ブルーの瞳は、優しい太陽の日差しを保っていた。この人天使だ！！

「そんな、まぬけな顔をするなよ。」と変態男が言った。

「そんな、事をいっては、失礼じゃないか。初めまして、早乙女の兄です。あなたのような、すてきなレディーにお目にかかれて光栄

です。」と私の手を取ると、柔らかい唇を押し当てた。

「ぶつ、ぷぷぷ、素敵なレディー!。」と言って早乙女が、腹を抱えて笑い出した。そこ、笑うところ?

「あのー。」とキララは、目を伏せながら口を開いた。

「僕は、びっくりしましたよ。弟に、試合を挑むなんて。しかも、
靈魂玉目当てでね。」

キララは、顔をトマトのように真っ赤に染めた。

「だけど、結局は、負けてしまつて。」

早乙女兄は私のあごを持ち上げるようにして手を置くと、澄んだ瞳でキララを見つめながらいった。

「いいえ、負けではありませんよ。それに、あなたは、もう一個の靈魂玉の持ち主の心を勝ち取ったのですから。戦っていた、あなたはとてすばらしかった。」

キララは、早乙女の瞳に吸い込まれそうだった。心臓がドキドキとして、それを押さえるようにして、手を胸の上に置いた。早乙女の顔が近づいてきて、鼻先がぶつかり合う位近くになると、キララは、目を閉じた。考えていたよりも、柔らかな唇が固く結ばれたキララの唇を奪った。二人の周りに甘い香りをした風が巻き起こり、空へと駆け上っていた。時が永遠のようで、キララの体の中に甘い蜜が血のように巡った。ファーストキスは、素敵なエンジェルと。

目を開くと、早乙女は私から少し離れて、立っていた。がちつと歯に固いものが当たり、キララは、それを手の上に吐き出した。

その瞳と同じように、スカイブルーの美しく小さな玉だった。太陽の光にかざしてみると、玉の中で、白い煙のようなものが形を変え、渦を巻いているのが見えた。時折、雲からこぼれる太陽の輝きのように、光を漏らした。それは、ビッグバン。星の誕生のように、神秘的な力を帯びていた。

「それが、僕の靈魂玉です。」

「え?」とキララは、驚いて、視線を早乙女に移した。

「あなたは、僕の心を勝ち取りました。僕はあなたの姿を見て、心

を捧げても良いと思ったのです。」

「だけど、テイナは何もしていないのに。それに、あなたは力を失ってしまおう。だから、これはもらえない。」と私は、その玉の乗った手を差し出した。

早乙女はその手を包むと、私の指を曲げて、その玉をしつかりと握らせた。

「紳士たる者が、一度、愛おしい人に差し上げたものを返されてしまつては、面目がありません。だから、あなたに持つていただきたいのです。それに、私が差し上げた靈魂は、私のあいの靈魂です。私自身は力を失うことはないのですよ。」

キララは、早乙女が本気なのを真つすぐな瞳の中に見ると、答えた。「あなたの、お気持ち受け取りました。ありがとうございます!」

「よかった。」と二人は、笑顔を交わした。

「おい、いつまで、いちやいやつてるんだ。」と変態男が大声を上げた。もうすこし、ボリウム下げられないのかしらね。

キララは、意地悪な顔を向けた。「あんた、嫉妬。してるんでしょ?」
変態男は、眉を上げると。びくびくさせながら怒鳴った。「お前つて、本当に馬鹿だな。そんな、わけねーだろう。」

「どうかしらね。」ふふん、とキララは鼻息を漏らした。

「なんだろ、この貧乳が」

「なんですつて、この変態男が!」

「俺にけんか売ってるのかよ。」ふたりの間にばちばちと火花が散った。

「まあまあ、お二人さん。喧嘩は良くないですよ。」のほほんと、早乙女が二人をなだめた。

「まあ、いい。おい、早乙女行くぞ。つたく、馬鹿にはつきあつてられねーよ。」と変態男は、私から顔を外すと、歩き始めた。

早乙女は、もう一度私の手を取った。「それでは、私のレディー。残念ですが、僕は行かねばなりません。またの機会にゆっくりとお話しできると良いですね。」

「はいっ」とキララは、元気よく答えた。

*

キララは、ベットに倒れ込むと、懐から大切そうにあの靈魂玉を取り出した。本当にキレイ。うっとりともてれしてしまう。そのブルーの玉の中に、早乙女兄の顔が浮かんだ。柔らかい口火の食感を思い出してキララは顔を赤らめた。今度は、光を帯びた顔がだんだん、曇ってきて、闇に包まれると、早乙女弟の顔に変わった。本当にそっくり。双子だから、当たり前だけど。

だけど、不思議だな。だって、早乙女は、お兄さんは天使で、弟は悪魔なんだもの。キララの目が重くなり、うとうとと夢の中に引き込まれそうだった。それに、愛の靈魂って何に使えるんだろう？ まあ、いいや、明日当たり、お乱たちにも、訊いてみよう。

ああ、なんて気持ちのよい。キララは、板の間に大の字に寝転がっていた。そう、今日は学校もお休みの土曜日の午後。そよ風が、魔女になって敏感なキララの嗅覚に次々と香りを運んできた。

ポツコリとふわふわの雲がどこまでも澄み渡った空を風の道に乗ってゆつくりと急ぐこともなく流れてゆく。

ごろりと転がって、木の手すりから顔を出すと、ずっと下の方にある庭や小路地を見下ろすことができた。あーあ、あの女中さんまた仕事さぼって、男の人引っ掛けてるよ。高らかな笑い声が、ここまで響いて、キララは小路地に目を移した。

小路地には、小さな子供達が、わらじを脱ぎ捨てると、帚にまたがって、地面すれすれをゆらゆらと飛行して遊んでいる。女の子達は、色のついた紙で人形や、動物などを折っている。おかつぱにして頭のとっぺんに赤いヒモで結んだ女の子が、きれいなツルを折り上げた。からからと下駄をならして、女中さんらしき人に嬉しそうに見せている。沢山作ったらしく、女中さんの手の上にたくさんツルがのせられていた。

女中さんが、呪文を唱えると、ツルはカサカサと音を立てて羽を広げると、空へと飛び立ち始めた。子供達が、それを眺めて指を刺したり、手を叩いている。

こちら辺は名門の古い家が多く、住んでいるのは魔法使いや、魔女がほとんど。この世界で魔族は、歴史を持つたたちのことを呼ぶキララは、体を動かして、手足を低い手すりから出して、あごをのせると、摩天楼のひしめく街を眺めた。あそこはダウントウンと呼ばれ、世界中の、キララの国では架空だと呼ばれる、生物達が集まっている。あの高い建物も、葵が言うよそ者（外国妖怪）が流れ込んできてからできたらしい。そう、こちら辺は元々、数千年の歴史を持つ花の都なのだ。

ダウンタウンから、はるか東の彼方に目を凝らしてみると、塔のようなものが高く高く、雲の上まで伸びている。その先は雲に覆われていて見えない。あそこには、魔族の帝が住んでいて、この都をおさめている。その周りを囲むようにして家が広がっている。そこには、帝の側近や貴族、有力者、姫君などの。住居なのだ。

そんなことは、葵は毎晩のようにおとぎ話のごとく私の枕元に座って話してくれた。正直言えば、キララは、妖怪なんて本の中だけに生きるものだと思っていた。だけど、実際に私の友達は妖怪だったり、架空だと思っていた動物ばかりだ。それともこれは長い夢なのかしら？

キララは、またごろりと仰向けに寝転がると、目をつぶった。我幸せなり。と口の中でつぶやくと、うとうとと眠り始めた。

どれ位、時間が経ったのか。キララは、揺り動かされて、だるい体を持ち上げると、目をこすってあたりを見回した。

お乱達が、すごく派手な格好をしてキララを囲んでいた。

「ティナ殿なにを、寝ておられる。約束を忘れられたか。」と恐ろしく目の周りを黒々と縁取り、赤紫の口紅で塗られた唇が、花のようにパカパカ動いている。

「あれ、なんか、あつたつけ？」とキララがとぼけて答えると。バシバシバシと頬を叩かれてしまった。

「マルク・ダークナイトのコンサートを忘れたの？苦勞して、チケツトとつたんだからあ。ティナ。しっかりしてよね。」とムツチばたばたとおしろいを頬におしつけながら、大きな鏡を覗いている。日が傾いて空をうす桃色に染めていた。だいぶ寝てしまったんだなとキララは思った。

それにしても、今日の彼女達の格好と言えば、いつにもなく派手だった。顔はなんだか人形のように真っ白で、頬にピンク色のおしろいをしてある。ぐるりと目の周りを、ラメやらブルーやらメイクをしていて、睫毛もぱさぱさして普段の三倍も目が大きく見える。さらに言えば、パンツが見えそうなほど短いスカートをはいて長い

足を出している。動くたびに白い腹が見えるほど、ための短い上着を着込み、袖が地面につく位長く垂れ下がっている。むき出しにした肩やまだ未発達達の胸元にドクロのペンダントやら椿の入れ墨をしている。一言でまとめれば、どんちゃん騒ぎ風の格好である。

「ほら、ティナ殿、着替えるのじゃよ。」とお乱に押されるままに、部屋の中にはいる。後ろで蛙子がぴしゃりと障子を閉じた。

「ねえ、まさかだけど、君たちみたいな格好させるんじゃないよね。」と後ずさりをした。

「そのまさかよ。さあ、観念するのじゃ。」

ひえー、助けて。お乱がキララを後ろからがしつと掴むと、ムッチーと蛙子が服を脱がし始めた。

「最近、ティナはこんなださい格好ばつかしてさ。なんだか、古くさいおばあさんみたいに、超ださいし。どうしたっていうの?」とムッチーがタンスの中身を放り出しながら言った。しかたないのよ、葵がいつも服を用意してくれるから。キララは、下着姿のまま、夕方方の寒さに鳥肌を立てていた。

ムッチーが大柄の花を優美に描かれた、血のようにどくどくしい赤の服を持ってきた。

「これよさげじゃん。」と喋ってなれた手つきでキララに着付け始めた。

それから、どれぐらいだったのか、あっちもダメ、こっちもダメと、きやあきやあいいながら、キララがリカちゃん人形のごとく着せ変えられていると、ママがはいってきた。

「楽しそうじゃのう」と恨めしそうな目つきをしている。彼女はここの家の女当主でありながら、一切のことはばあや家老達に任せている、名ばかりのダメ当主なのである。だから、とうぜん暇を持て余している。結婚してしまった今、男遊びも許されない。そういうわけで、がぜん、楽しそうな声を聞きつけて、ふらふらとやってきたわけだ。

「ママ、恥ずかしいから」と言ってみたもの一向に出てゆく気配

がないどころか、ばりばりのファッションデザイナーのごとく、手伝い始めた。

「帯はこの色を持ってきたほうがエレガントなのじゃ。」

「ふんふん、なるほどねー」と三人も感心している。

「で、髪の毛はこうやって逆立てて。」と櫛で髪の毛を逆立ててくる。これはツバメの巣のような髪型になりそうだとキララはため息をついた。

「で、こんなに着飾って、どこに行く予定なのじゃ。」

三人は、呼吸を合わせると、中指と薬指を折り曲げるとはねながら「ダークナイト。我らの救世主なり！」とロックスターのファンのように叫んだ。

「あの、マルク殿のコンサートにゆくのか?! なんとうらやましい。」とママが興奮している。

「ティナ殿の母上は、マルクを知っておるのか?」

「当たり前じゃ。私が留学しておった時に、マルク殿とは学友だったのじゃ。それは、面食い男じゃった。」

「ええ、本当か。うらやましいの。」とすっかり打ち解けている。

おまけに、キララに変わって行きたいなんて言い出す。恥ずかしいから、それだけだと、キララは必死で止めたのだった。娘としては、これ以上親の恥ずかしいところを見せたくはなかった。

「しかし、マルク殿のコンサートに行くのにそのような格好ではちと、足りないのではないか。いいわ。妾が手ほどきをして上げよう。」と言って、次々と、女の子達の髪の毛をいじくったり色をつけたり、アクセサリーをぶら下げたりと大忙しだった。

陽が暮れ、一番星が輝きだすことになる、4人は、すばらしいほどまでに飾り立てられた。そろそろ、行く頃だとお乱が切り出すと、ママは惜しそうにしていたが、手を振ってキララの部屋から去っていた。

はあ、ようやくママから解放されたよ。キララは、塗りたくって重くなったまぶたを上げて空を見つめた。明日は、目の周りが筋肉

痛かも。

「さてと、行こうか。ティナ、帚。はやく。」とムッチが言い出した。

え？帚に乗って行くの？だって、君たちは、飛行能力がないのでは。

「ほら、母君のお古の長いやつ。前みたいに4人乗りして行こうよ。」

「いや、そんなの危ないよ。歩いて行かない？」と切り出してみた。「大丈夫じゃ。ティナ殿は帚に乗るのが上手じゃから。それに帚で行かねば、間に合わぬ。」と却下された。

実を言えば、キララは、ろくに帚にも乗れないのである。魔女失格だと言われそうだが、本当にコントロールが難しいのだ。今までに何度も葵から手ほどきを受けてきたが、たいていの場合足が地面すれすれに浮かれる位で、片足ずつ地面を蹴っ飛ばしながら前に進むと言う惨めな飛行をしているか（その姿はアヒルのようだ）と葵は語っていた。もしくは、力を入れすぎて、ロケットのようにすっ飛んだと思ったら、ぐるぐると回りだしてしまう。高いところから飛び降りれば、暴れ馬に乗るみたいにあっちこっち飛び跳ね回って、振り落とされたことも数知れない。一度なんて、隣の家の盆栽じいさんの松の枝だっておった前科がある。

だから、4人乗りなんてとんでもない。

あーあ、だけど気がついてみれば、私を先頭に、お乱、ムッチ、蛙子が古い帚にまたがって、手すりの上に立っている。この状況がどれほど危険なのか分かってもらえるだろうか？

「じゃ、ティナ殿、頼むぞ。」とお乱が言った。止める間もなく、3人の足が手すりをけりる。

落ちる際に足に当たった、瓦を何枚か巻き添えにしてしまった。

4人は、高らかな叫び声を上げ落下してゆく。キララはとにかく、全身に力を込めた。この、上がれ！！地面すれすれで、急下降していた帚は急ブレーキを開けるようにして止まると、風を巻き起こし

て、埃を舞い上げ、のんびりと生えている草花をなぎ倒した。

ほっとしたのもつかの間、頭が引きちぎれるほど唐突に飛んだかと思うと、空高く舞い上がり、街道へハヤブサのごとし急降下する。いやー、もうどうしたら良いの？

「どいてどいて！」とキララは声を張り上げると、驚いたように人々は脇道へと飛び退いた。何人かひき殺したかも。キララの目に涙が光る。

「ティナあ。どうしたのじゃ！！」と必死に私の体にしがみついているおらんが叫んだ。

いやね、スリルがあつていいじゃないか。ってそんなこと言えないよ。今回ばかりは、フォロー不可能です！！

*

とにかく、方向は間違つてなかったようで、あつという間にダウンタウンに到着した。といっても、まだ帰はおろしてくれないんだけどね。というわけで、複雑に立ち並ぶ建物や同じように飛行する者立ちに大いなる迷惑をかけながら、中心部へと飛行していた。

少しずつだがコントロールできるようになってきたのをキララは、ぎゅっと握りしめている腕から感じ取っていた。思ったように行きたい方向に意思で動かせる。だけど、速度は、いっこうに落ちようには見えない。猛スピードで飛び去るキララ達は生きたミサイルのようだった。

もしも、交通法が存在するのなら、今頃は間違いなく飛行パトカーにおわれているわね。まだ行人の少ない上空で良かった。これが、地上であったなら、間違いなくボウリングのピンのように人々を飛び散らし、ことごとく4人はテロの容疑で捕まるに違いない。

とにかく降りなくては。そう思っていると、帰も疲れたのか、のろのろと速度が遅くなってきて、ダウンタウン中心名所の運命の広

場にゆっくりと降り立った。

広場の中心には、この都を建設した菊池西郷の勇ましい姿が木造で立っている。

「ど、ど、どうしたのじゃ。」

「足ががくがくする。」

4人は、その場にへなへなと座り込むと、しばらくのあいだ立ち上がることができずにいた。通行人達が、何事かと興味津々でこちらを見ている。

どう言い訳したものか。

「忘れてただけけど、あの帚少し調子が悪かったんだよね。」と冷や汗がたれる。

「なぜ、それを先に教えてくれなかったわけ。」と乱れた衣を直すのを忘れてムツチが震え声で言った。

「まあまあ、今は命が助かっただけでも、あたいは嬉しいのじゃ。」と蛙子が言った。

「で、今、何時？」

「酉の中時じゃ。」

「そうか、だいぶ長い間、空にいたと思ったが。コンサートは、戌の上時からじゃ。まだ、時間があるから、歩いてゆこう。」

4人はお互いに支え合いながら、まだがくがくする腰を立たせ、ヨロヨロと西の正門へと足を向けた。

そういえば、キララはダウンタウンに来るのは始めてだったな。

しばらくすると、今までの怖さも失せて、あたりの景色に魅せられた。まるお祭りの縁日のようだった。

宝石箱のようなショーウィンドウには、あでやかな着物が、ぼんぼりの柔らかなを受けて飾られている。しかも、透明人間が着ているかのように、機会仕掛けの人形のように動いている。キララが覗き込むと、正座して、袖を抑えて、筆を手に取る。うす桃色の紙に筆で撫でている。絵を描いてるんだ！

「美しい紅梅色の着物じゃのう。妾も着てみたい。」とお乱たちも

魅せられ覗き込んでいる。

後ろの方では、すーっと引くように美しい紫のグラデーシヨンの着物が扇を手に取りゆっくりと舞いを披露している。動きたびに袖元や、床に広がる裾に描かれた椿がこぼれんばかりに大柄だった。

絵を描いていた着物がキララの目の前に紙をはためかせた。

誰かの姿絵のようだけど。

「それ、ティナじゃん。」とムツチが目細めて言った。

「まことじゃ。まことじゃ。」と言って蛙子が手をたたいている。

確かに、キララだ。すごーい。そっくりだ。

「上手だね。」と無い顔に驚いた表情を魅せたり、和紙を覗き込んだりしている、結界のそとに紙を差し出した。注：結界つて、ここではガラスの役目を果たしている。

「え？私にくれるの？いいのかな？」

なんせ顔が無いのでよくわからない。そろそろと手を出して、受け取ると、着物は手を引つ込めると、元の立ち位置に戻ってゆく。

「よかったじゃん。私でも、姿絵なんて一度も描いてもらったこと無いよ。」とムツチがうらやましそうに、絵を覗き込んだ。

絵の中でキララは十二単のように何枚も色のついた着物を重ねて立っている。和紙の表面は不均一だったが、それが傾けるたびに、光の反射の仕方を変えて、着物の模様のように見えたり、動いているようにも見えてきれいだった。

キララは、大切に姿見を懐に入れると、着物に手を振った。

「ありがとうー。」。着物も嬉しそうに手を振る。

空を見上げると、沢山のぼんぼりや人魂が揺らめいて、高く積み重なった建物の木柱や瓦を複雑に照らしている。時折、女子供の顔が覗き、指を指しては楽しそうに笑い声を立てている。

突然、殺気がしてキララは、後ろを振り向いた。その後ろには、細い横道が真っ暗な闇に続いていた。気のせいかな。だれか、キララのことをみてると思っただけ。

突然、私の着物の裾をひっぱって、お乱が暴走し始めた。

「ティナ殿！走るのじゃ。」

「ちよつと、ちよつと、危ないつて。」

二人は、ムツチと蛙子を後ろの方に置いて、道行く人の群れをかき分けてゆく。

だれか、知ってる人でも見かけたのかな？それにしても、この早さ、彼女の巨体からは想像もできないほど、機敏で素早い。

「まにあつたあ！」

車を押した団子屋が残りの団子を片付けようとしているところだった。

「おぬし、このような時間に店を畳むとは何ごとじゃ。」と腰の曲がったおじいさんに、銭を渡しながら言った。

「今日は、えーと、たしか、たころうないん」

「ダークナイトじゃ。」とお乱が訂正する。

「そうその、たころうナイトのおかげで人も沢山、商売繁盛。団子も無くなったので、今日は酒でもかって、さっさかと家にも帰ろうと思つてな。」

「ちよつと、まつてよね、いきなり走り出して、びっくりしたじゃん。」と残りの二人が息を切らして追っかけてきた。

「団子は、勝ち取つたぞ。」

「もしかして、団子のために？もう。お乱つたら。迷惑じゃん。」

「団子の辞書に迷惑という言葉はない。」と幸せそうにあんぐりと大口を開けて団子をほおばる。嬉しさのあまりか首が伸びて蛇のようになつてうねっている。

「仕方ないな。」といつてムツチは腕組みする。

と、今度は、蛙子が突然跳ね上がる。そして、ぴよんぴよんと、はねて人ごみの中に消えて行く。

「ちよつと、まちなつて。」

キララと団子を抱えたお乱を引っぱり、ムツチが足早にその後を追いかけてゆく。

ひらひらと、一匹の蝶が飛んできた。さらに進んで行くと、一匹、

二匹、四匹と数が増えてくる。

そして、一人の道化師の前に蛙子が、ちょこんと座っている。

男は顔を真っ白に塗って、赤い髪の毛が大犬の毛皮のように長く腰まで伸びている。顔には、目の上を赤く塗っている。

片手に小さな小瓶をもち、ストローのような棒の先を小瓶に突っ込むと、逆の端に口をつけて息をふーっと吹く。すると、端の方から何かが生まれてくる。世にも美しいアゲハ蝶が羽を広げ世界へと飛びたった。すると、ぱくつと蛙子が舌を出して食べてしまう。いくつも出てくる、蝶に彼女は幸せそうだった。

一匹生き残った蝶がはらはらと弱々しげにキララの方に飛んできた。指先を出すと、その上に止まった。七色に輝いている羽に、墨を流したように黒の線が優美に伸びている。ぱちっ。まるでシャボン玉がはじけるようにして、蝶があとかたもなく消えてなくなってしまった。

あれ？

「蝶の水玉なんてどこでも手に入るじゃん。それに、早くしないとコンサート見逃すじゃん。」というムツチのツルの一声に、他の三人は忘れていたのを思い出して、いそいそと会場へと足を向けた。

歓声、熱気、スポットライト。

「マルク！マルク！マルク！」英雄の名を叫ぶかのようなように皆叫んでいる。魔法使いも、魔女も、妖怪も、モンスターも全ての妖怪が押し合いへし合い、空高く両手を上げ揺らしている。姿形違おうとも、みな同じように美しい着物で着飾り、顔には白くおしろいをはたいている。

生きる者のエネルギー。莫大なエネルギーがこの会場にひしめきあい、渦を巻き、地面を揺るがしている。

キララたちは、人ごみを押しわけ、舞台の近くへと進んで行く。突然、灯りが消えると、あたりは闇に満ちた。こうこうと美しい満月が空に光るだけになった。お乱が私の腕を絞るようにぎゅっと握る。周りがしずかになりはじめると、かちかちと舞台を始める合図があたりにこだました。舞台の中央にスポットライトがこうこうと照らされた。

お控えなすって、お控えなすって

良く通る低い男の声があたりに響いた。あたりが、しんとすると

さっそくのお控え、ありがとうございます

スピーカーも無いのどこから声があるのかと思っていると、しゅつと風を切り、一本の太刀がスポットライトの中心に突き刺さる。

今宵美人月の軒下借り受けましての御仁義、ありがとうございます。

雪よりも白い手が突き刺さり震えている太刀に手をかける。いかにも旅人の面食い男と言う出で立ちで、一人の男が現れた。太刀を斜め下に伸ばして、真つすぐと観客の方へ顔を向ける。周りと同じように、顔を真つ白に塗り、目の周りを赤く染めている。きりりとハンサムな眉の下にぎよろりと心臓貫く眼が二つ。赤い血のように2筋の線が目元から流れるようにさつと描かれている。長身だが、天狗のように高い下駄を履いている。

知らざあ言つて聞かせやしょう

ちーんと澄んだ鐘の音が響くと男は立ち位置を変えると、刀を肩に奥と、さーっと手を動かす。またその仕草が、意味ありげでしびれる。だれかが、きゃーっと高い声を上げる。

私は歌うために生まれてきた

覚えている、闇が私の生みの親だということ

突然の爆音がして、うつとりと見とれていた観客を飛び上がらせた。

闇はお前達をすくうために、僕を救世主として命を与えた

最後の声が伸ばされながら、金属を引つ掻くような音が当たりに響き渡った。また爆音と共に、リズムの良い音楽が流れ始めた。

そして、舞台には、ドラムや、ギターを鳴らすメンバー達が現れた。ギンギンといくつもの手がギターをかき鳴らし、ドラムが爆音を立てて打ち叩かれる。

マルクは、襟を引き裂くようにして、筋肉の盛り上がった上半身をあらわにした。

そして、両手を広げ、全身の力を込めて歌を歌い始める。顔には、狂気に満ちていた。

観客は、酔いしれるように跳ね、マルクの歌を叫ぶようにして歌う。何万もの手が宙に上がり、激しく風に煽られた草原の草のごとく揺れている。その姿は、おかしな格好で踊りながら、行列を作る百鬼夜行のようにも見えた。

クライマックスが近づく。

私は、救世主。お前達のためにも命は惜しくない。

観客は叫ぶ。「喰わせろ、喰わせろ、お前の魂を！」

マルクは、太刀を掴むと、おもむろににその鋭い刃先を腹に食い込ませた。それを抜くと、当たりに、血しぶきが飛び散り、その血を浴びた観客が気絶する位大きな歓喜の金切り声を上げた。そして、その歓声が波紋のように広がり、観客は、一種のトランス状態に入ったように、激しくからだを揺り動かした。

「ちよつと、危ないから。」というキララの声もかき消され、群衆の熱気で息もできない位苦しかった。

しばらくすると、あたりが静かになってきて、キララも舞台に目を移すことができた。

マルクが、また一筋のスポットライトの下で、片膝をついている。床に血が広がってゆくのが見える。桜吹雪がどこからともなく吹いてくる。

私もこれで役目を果たすことができた。

これで、悔いること無く死んで行くことができる。

そして、がたつと血の海の中に倒れ込む。ハラハラと、落ちてくる花びらが雪のように美しかった。

ライトが消える。

次についた時には、跡形も無く、舞台には一本の太刀が立っているだけだった。

*

周りが、色々な歓声や感想を語る中、キララは一人放心状態だった。今、見た光景が信じられなかった。

「どうしたのじゃ、元気がないのう」とお乱が顔を覗き込んできた。

「あの人、死んじゃったの?」とキララは震え声で訊いた。

他の三人はあはは、と笑う。

「まさか、あれは妖術じゃよ。」

そうだったんだ。だけど、すぐリアルだった。人はあんなに感嘆に自分のお腹を切る事ができるのかな。それも、死を恐れずに。

キララには、絶対にできない。まぶたを閉じると、赤い血が広がってゆくのが見えた。今日は嫌な夢を見そう。

「さてと、家に帰らねば。帚は、無理じゃな。妾は兄上に迎えにきてもらうぞ。」とお乱が言った。

ムツチも蛙子も迎えを呼ぶために、懐から葉っぱを出すと連絡を取った

「で、ティナはどうするの?」

「私は、帚で帰ろうかな。」

「え?大丈夫なのか?」

「うん、近いし、それに一人だから、コントロールも難しくないと
思う。」

「そうか、それじゃあ、気をつけてな。あさって、学校で。」

他の3人に別れを告げると、キララは、どこへ行くとも決めず歩

き始めた。

キララは、さっき殺気を感じた小さな道の前に立っていた。光もその小道に忍び込むのを避けているかのように真っ暗だった。

キララは、ゆっくりとその小道の中に入って行った。最初は壁伝いに落ちている者につまずきながら進んでゆく。やがて目もなれると、向こうの方に白い者が動いている。人のようだ。屈んで、なにかに話しかけているようだった。顔を上げてキララに気がつくと、こちらの方によってきた。キララは、腰にかかった、ステッキに手を伸ばす。

「てい…な？」その影が声を上げた。

うららだった。闇のせいかな、顔がやつれて見える。

「こんなところで何やってるの？」

うららは、何も言わずにキララの手首を掴むとすたすと、小路を出た。

「ねえ、どうしたの？」

「こんなところにきちちゃだめだよ。あぶないじゃないの。」

「だけど、うららは何をやってたの？」キララはまた訪ねた。

「ちよつとね。ほら、あそこは貧しい人たちがいるから、話したり、食べ物であげてたの。」

「こんな夜更けに？」

「ねえ、ていなは、なにをしてたの？」と今は、くすんで見える金髪に手を通した。手先が汚れている。

「コンサートに言ってただけど。」

うららの顔が陰った。「どうなんだ、よかったね。たのしかった？」

「うん」

沈黙が続く。

突然、悲鳴が聞こえた。

「どうか、助けて、放してください。私は何も悪いことはしてませ

ん。」と命乞いしている。

「今のなに？」

うららの、声が低くなる。「人間のね、たましいを食べようとしてるんだよ。」

「え？」

「情け容赦もなく、罪も無く、弱い者は喰われるのが運命なのよ。」

「じゃあ、助けなきゃ！！」

「ほっときゃいいじゃん。」

「そんなの、ダメだよ。」とキララはうららを置いて、叫び声の方に走り出した。どうしちゃったんだろう。うららじゃないみたい。

すぐに見つかった。

百目妖怪、釜堂、馬男

小さな小屋で、3人の妖怪は、子供はのせらせそうな大きな皿に、なみなみとそそいだ酒をあおっている。

キララは、窓越しに中をのぞいた。

その前には、盆の上に光る玉がのせられている。

「この、魂はな」と馬男がいななきのようなし哀れ声で他の妖怪に言った。

「最近自殺した人間の男の子の魂なのじゃ。」

「それは、うまそうだ、うまそうだ。良い色をしている。」

「たかだか、受験で落ちた位で首を吊ったそうな。」

「もつたいないの。魂は大切にしなければ。」

「のろのろと、天に登って行くところを捕まった。」

「我々には、幸せな魂には近づけないからのう。」

「悲鳴を上げさせたまま、食べると舌がぴりぴりして、それがたまらん。」

よく見ると、皿の上の魂の中、一つ一つに顔が浮かんでいる。

あの一つ一つは、キララの世界で生きる人たちだったんだ。成仏もできずに、こんなところで食べられちゃうなんて。助けなきゃ。

馬男が逃げようとする魂の一つを皿からつまみ上げた。口元に持

つてくると、何やらささやいている。魂は、乱れた心のように光を放った。

「いやだ、いやだ、死にたくない。家に帰してくれ。」

「お前はな、死ぬことも、生きることどちらにも自分の意志を通すことができなかった人間だ。」

「そんな事はない。私はただ、世間に対して嫌気がさしていただけだ。」

「しかし、事實は、お前が自分自身に対して嫌気を持っていた。自分が嫌いだっただ、弱くて、何も変えることができない自分に対して。」

「そんなことはない。そんなことはない。」魂の光が弱々しくなつてゆく。

「今の人間は弱い。生きること弱いのだ。だから、死んでも、宇宙の一部になることができる、喰われてしまう。なんと儂い夢なのだろうか。」

「僕にはなにかできたはずだ。もう一度、帰れたら約束しよう。今度こそ、強く生きてみせる。」

「その一言が訊きたかった。」馬男の声が意地悪く低くなった。「お前のな、命は一度きりだ。捕まった以上喰われてしまう。喰われたからには、もう生き返ることも生まれ変わることもできない。」

「たのむ、頼むから、後生だから助けてくれ！」

叫び声に酔いしれるように、馬男は魂を食らった。口の中でゆっくりと噛み締めてゆく。苦しそうな声が聞こえるがやがて聞こえなくなつた。他の魂がそれをみて激しく騒ぎだした。

みな哀れな声を出して助けを求めている。まるで、地獄絵巻を見ているようだった。

キララは無我夢中で飛び出した。

「やめて！」

「なんじゃ、なんじゃ。酒盛りの邪魔をするのか。」釜堂は、ゆっくりと腰を上げると、ゆらゆらとキララの方に近づいてきた。キラ

ラは、懐から小さな剣を取り出して、その男に刃先を向けた。

「ばかな、小娘じゃ。」と言って、キララが反応する前に、にゅつと手を伸ばして、髪の毛を掴む。

「痛いっ。はなせ、この妖怪め」と言って手足をばたばたをさせる。

「よくみれば、魔女ではないか。」

「なに魔女だと。」

「魔女がここで何をしている。」

「魔女は嫌いじゃ。食ろうてしまっか。」

「喰ってしまおう。食ろうてしまおう。生き血の通った肉だ。」

釜堂は、ばたつかせているキララの両足を持ち上げると。キララは、逆さまになったまま。(うう。パンツが見える)。そんなことを考えている暇はない。

足をにぎる手に力がこもり、キララは痛みに悲鳴を上げた。いやだ、誰か、助けて。

さつと風が吹いた。低くどすのきいた女の声がする。

古今東西風に吹かれ、千年娘の流浪が、悪事をさばく

尊い命にさまらなぬ、悪戯を重ねる悪漢の筋の通らぬ悪行は、どうも胸くそ悪くって切らねば、心乱れて落ち着かねえ。

おとなしく、正義の刃を受けてみやがれ。

ぎゃあ、と叫び声が聞こえ、キララは畳の上に叩き落ちた。目の前に、釜堂の片手どくどくと血を流して薄汚い畳に転がっている。

その前には、細長い銀の刀が血を滴らせている。腰まで伸びる鴉の羽のごとし黒髪を頭の後ろできりりと結んだ女が一人、釜堂を睨みつけている。

小花のように小さく、血のように赤い唇が動く。「放せ！お前にそのおなごを、食ろう権利はねえ。」

「お前何もの」と言って百目妖怪が大太刀を抜く。その手を止める

ように抑えると、釜堂が目を光らせながら言った。

「さて、きいたことがある。たしか、どこともなく現れ、捕われた人間の魂を成仏させる。ジャマする者に容赦はしない。そうだな。」
「ほ、ほう。良く知っているじゃねえか。頭の中は空っぽじゃと思っ
っていたが。」

「ぬう、なんだと！」

「馬鹿者じゃと言ったのじゃ。」

「この尼が！」

「やつちまえ！」

3人が、女に飛びかかる。

しゅつと3本の閃光が走る。

「うむむ、お前はなにやつ。」釜堂が腹を抑えて倒れながらうめき
声を上げた。

「漆黑ガラスのお糸。いまさらそのこと教えても、お前には約に立
たねえけどな。」

「お、いと。恨むぞ。」と苦し紛れにそう言うと、どさつと音を立
てて畳の上に倒れる。

お糸と名乗る女は、懐から紙を取り出すと、刀から血を拭った。
転がった皿からこぼれた、魂の光を手に取ると外に出た。ふつと息
を吹きかける。一つひろって、息を吹きかけ、一つ拾って、息を吹
きかけ。魂達は、柔らかな風に乗ったタンポポの綿毛のように空へ
と舞い上がってゆく。

「もう、つかまるんじゃねえ。」

魂達は、お礼を良いながら空へと昇ってゆく。

ことりと音がして、お糸は振り向いた。

妙な格好の女の子が立っている。髪も服も乱れてぐちゃぐちゃだ。
顔は真っ白だし、ひどく目の周りを真っ黒に塗っている。いったい
この娘は（勿論キララのことだ）

「あの」と女の子は言った。

「娘。一人であぶねえじゃないか。」

「助けてくれて、ありがとう。」

「お前を助けたんじゃない。魂を助けにきただけじゃ。」

この女の人は、いったい誰なんだろう。カラスのように全身真っ黒けっけ。顔はきれいだけど、なんて鋭い目をしているんだろう。

お糸は、最後の魂に息を吹き込むとキララに体を向けた。

「お前、人間じゃろう」

Nine th Candy : 人の運命なんぞ。

なんで、知ってるの？キララが人間だったこと。今まで誰にもばれたこと無いのに。

お糸は、キララの心を読んだかのように口を開いた。

「わしも人間じゃからじゃ。」

「うそ。」

「まことじゃ。」

キララは、体を揺すつてきた。「どうやって、この世界で生きているの？ばれないの？輸人間の世界に帰れるの？」

「そう、質問攻めにされては、わしも頭が痛い。」と言ってあたりを見渡す。

「長い話になりそうじゃ。このように気味の悪いでは、ゆっくりと話もできん。お前、帚に乗れるのか？」

「ううん。どこに行くか分からないよ。」

「では、わしが飛ぼう。かせ。」と言って帚を掴む。キララはもまたがって、その女の腰に手をおいた。

ダウンタウンを離れて、しばらく飛ぶと、最初に見た天女の木造が見えてきて、その足下に降りた。

「ここなら、誰にもきかれること無く、ゆっくり話せるじゃろう。」

「あなたは、だれ？」

「わしの名は、この世界ではお糸。人間の世界では、松倉菜花式部と呼ばれておった。おぬしは？」

「百怪ティナ。松本キララよ。」

「百怪家の娘か。どのようにして、百怪の一族になったのじゃ。」

キララは、できる限り詳しく今までに起ったことについて話し始めた。

「なんと、能力交換術で。では、本物の百怪ティナはお前の世界にいるのか。」

「そういうことになるの。」

「家に帰りたいか？」

「うん、だってパパやママに会いたいもの。」キララは目が熱くなつた。

「そうか。おぬしは近代の娘なのじゃな。わしは、今から千年前の平安に生きておった。」

「じゃあ、今まで生きて？」どうみても、千才のおばあさんというよりは、年頃、多分25歳前後だろう。

「そう、私は不老不死じゃ。永遠の魂を手に入れた変わりに、老いることも、死は許されない。」

「でも、どうやって。」

「あれは、いつ時だったか。わしが、22の時じゃった。わしの大切な一人息子が物の怪に取り憑かれた。わしは陰陽師に頼んで、物の怪を追い払ってもらおうとしたのじゃが、失敗に終わった。愛おしい息子の体から魂は持ち出された。わしは魂を取り返そうと、陰陽師に頼み込んだ。陰陽師は確かではないが、持ち去った鬼は、人間の魂を食らうと言う。だれであろうとわしの息子の魂を盗んだ者は許せなかった。私は、復讐心のあまり心が鬼になりかけていた。涙にくれて床に伏せていると、誰かが、戸を叩くではないか。開けてみると、誰もいない。そこには一冊の書物が置かれていた。開いてみると、そこにはおぞましきことがかいてあった。鬼の世界にゆく手段。100人の陰陽師の血を集めて煮詰め、飲むことで、鬼の世界にゆくことができる。神からの救いかもしれない、畏かもしれなかった。しかし、最愛の息子をうしなつたわしにはこの世に未練は無かった。そして、わしは、貴族の娘から、花魁へと落ちぶれた。数多くの陰陽師をたぶらかし、寝取つたあとその寝ている裸の胸に小刀を突き立てた。そして、99人目の陰陽師をやつた後、私は捕まってしまった。牢にとじこめられた。それでも、わしは、あきらめなかった。99人の血が集まった。最後の一人が立ち無くて鬼の世界に行けるに違いないと。わしは、血を飲み干した。なん

と、扱ったことか。からだが炎のように熱く、息ができないほど苦しくなった。わしは、胸をかきむしり、呪いの言葉を吐いた。そして、目の前が真っ暗になった。

気がつけば、びしょぬれになって、川原に横たわっておった。わしは、鬼の世界に来たと知った。息子をすぐにさがしたかったわ。しかし、わしは弱かった、最後の血が無かったためじゃった。それに、この世界のことを一つも知らない。わしは、必死じゃった。一番容姿の似ている魔女と名乗って、どうにか毎日毎日を切り抜いていた。しかし、死が体を蝕んで行くのが分かった。全てをかけて個々までたどり着いたのに、なんとうらめしいことか。そして、なんという神の悪戯か、わしは万国から届いたと言う杏武呂死亜アンブロンシアと呼ばれる不老不死の薬を手に入れた。そして今までわしは、息子を捜すために、人間の魂の悲鳴を聞くたびに姿を現す続けた。」

なんと言うことだろう、このひとはただ一つの思いを千年もの間、絶え間なく思い続けていたというのか。ずっと一人で。

「人間の世界に帰ったことは？」

「ない。」

「じゃあ、キララが家へ帰る方法は分からないままなのね。」

「ああ、すまぬ。しかし、わしと違って、お前は能力交換術を使っ
てこの世界にやってきた。ならば逆の方法も存在するだろう。期待
を持つんじゃない。」

「うん、そうする。それに、キララはこの世界嫌いじゃないもの。」

お糸は、しばらくの間黙っていた。

「お糸さんは、どうして帚に乗ることができるの？」とキララは遠くの方で光を放つダウンタウンを見つめながら言った。

「魂はな、長く生きれば生きるほど、力を持つんじゃない。帚に乗れるほど、力を持ったのは最近の事なのじゃ。だから、おぬしは、運が良い。来た時から、力を持つことができたのじゃから。」

「そんなことないです。まだちゃんと飛べないし、どういふ風に魔力が働くのかよくわからないもの。」

「考えるのじゃなくてな、感じてつかむのじゃ。そうすれば、すぐに使いこなせるようになるじゃろう。」

「はいっ。」

「そういえば、あそこの近くにあった小道に浮浪者みたいな人たちが沢山いたんだけど。」

「あそこはな、孤児、親を持たぬ者が集まる場所なのじゃ。噂によると悪魔の集会もあそこで庄ときいておる。」

「そうなんですか。」

「じゃあ、なんで、うちらはあんなところにいたの？あんなところに住んでいるわけも無いし。」

キララとお糸はしばらくの間、色々話をした。

「そういえば、おぬし、家に帰らなくていいのか？」

「し、っしまった！門限！！」

「うわ、どうしよう。ばあやに殺される。私帰ります！」

「送ろうか？」

「いえ、大丈夫です。なんだか、飛べるような気もするし。」

「そうか、では、お前に会えて、良かった。また、会える機会があるといいな。」

「はい、きつとまた会えます。」

キララは、帚にまたがった、ちょっと大きいけど、感覚、感覚。

キララは、帚が宙に浮かぶイメージを頭に思い浮かべた。ふっと足が地面からはなれて、ゆっくりと上昇し始めた。やった、うまくいった。キララは、お糸さんに手を振ると家の方角に向かって飛び始めた。

Tenth Candy : 不良娘の恋

寒いよ

暗いよ

お腹空いたよ

門限を破ったキララはことごとく、鬼婆になったばあやに追われ、今は、捕まって離れの鎌倉に閉じ込められていた。丸一日食事も一切抜きでこの中で過ごさなければならぬ。

目が慣れてくるとかまくらの中に置かれた古い物が見えてきた。なんだか、埃をかぶっていて、それがまた怖い。

時々、ごそごそとネズミが動く音が聞こえてきて、そのたびにキララは飛び上がった。寒いし、お腹はすくし、キララは惨めな気分だった。

ごそごそ。ごそごそ。ネズミにしては大きな物音だ。キララは、目を見開いて、その戸のする方に体を向けた。

がっしやーん、陶器が割れる音がした

「はれま、またやってしまったがな。ばあさんにおこられるべ。」としわがれ声がする。

「そこにいるのは、だれ？」

「おんや、ここの家のおてんば娘の声が聞こえるが、気のせいかもしれない。なんせ、年が歳だからな。」

「いえ、気のせいなんかじゃありません。テイナです。」とキララはおそろおそろ、声のするほうにそろそろと近寄った。

ちいさな、小人のようなじい様がふたをしたかめの上に座っていた。真っ白い髭が膝のところまで伸びている。片手を膝において、考え事をしているようだった。

「あのー」とキララがおそろおそろ話しかけてみる。

うんともすんとも、動かない。

「すみません、ここで何をしているんですか？」
それでも動かない。

キララは手を逃してじい様の肩を揺すってみた。じい様が地面に落ちると、粉々に砕けた。残った顔が上を向いて、キララを見つめているようだった。ひいいい。

「えへへへえ、まんまとひっかかりおつたな。」

キララの隣に、じい様の逆さまな顔があった。ほっぺたがぼたもちのように垂れており、赤く光っている。

「ぎゃあ」とキララは横に飛び退いた。

「うひゃひゃひゃ、おかしなおなじゃのう。」

むかあつとしたキララは、じい様に飛びかかって捕まえようとした。じい様はするりと消えてなくなった。

「こつちじゃこつちじゃ」とこんどは、階段の上で手招きをしている。

キララは、落ちないように、2階に上がる急な階段を上っていった。

2階には小さな窓があり、そこからかすかに太陽の日差しが差し込んでいる。

「ほら、これじゃ。お前さん、前に欲しいって言ったやつじゃよ。」

「じい様はケケケと笑って、キララの前に一冊の書物を放り出した。
「なに？」

「あれじゃよ、あれ。はれ、なんだったかな。あれま、忘れてしまった。あれじゃよ、あれ。」

あれでは分からないのだ。とりあえず、キララは、その埃をかぶった書物を開いてみる。カビくさい香りと共に、そこには、魔法陣やら訳の分からない記号が描かれていた。

何ページかめくつているとそれは、どうやら古い魔法の書物のようだ。もしかしたら、キララの世界に帰れる方法が書いてあるかも。キララは、期待で胸を膨らませた。日向のしたで、横に寝そべって、

間抜けな顔をしているじい様の前に座り込んで質問した。

「ねえ、おねがいだから、教えて。ここには何が書かれているの？」
「おや、お前は誰だったかな？どこかで、見たような顔だが。」と
じい様は、皿のように大きな目が飛び出しそうで、ぐるぐると回し
ながら言った。

「テイナよ。百怪テイナ。この家の跡取り娘。」

「そんな、娘の名はきいたことが無い。わしゃあ、この倉ができる
よりも前から生きておるが、そんな前一度もきいたことはない。」
ときつぱりと言い張った。

「思い出して。どうしても必要なの。」キララは、必死だった。

じい様は、体を上げて、日差しの方に顔を向けてあくらをかくと、
なにかかんがえているようだった。

「はてな、何をしておったのか。どうも思い出せん。あれま、ばあ
さまが見えるぞ。ばあさま、ばあさま、どこへいつちまったのじゃ。
わしを一人にしないでくれ。」

ぱりん、と音がして、じい様の体が割れて、埃のかぶった木板の
上に落ちる。中身は、陶器のように空っぽだった。

もう、キララはあたりを見回した。どこにも見当たらない。しか
たないなと思いつつ、あたたかな日差しを受けながらうつ伏せに
寝そべると、とりあえず書物を広げてどうにか解読してみることに
した。

表紙は黒で、金の文字が書かれているが、はがれかけていて読め
ない。

最初のページには、きれいな列を作っているが、くねくねとした、
変わった文字が書かれていた。最初の文字は、マルの中に点。次は、
米という文字にも見えたし、太陽の形にも見えた。日本語じゃない
みたい。

耳元でし哀れ声がして、キララは飛び上がった。

「その昔、言葉は真を語るために八百万の神の口から生まれた。そ
のものの持つ力は闇にもなれば光にもなった。運命をも変える力を

持つておつた。「じい様が、キララと同じように寝転がって、足をこどものようにばたばたとさせている。

「じゃあ、あなたはここになんて書いてあるか読めるの?」

「わしを馬鹿にしちよるのか。読めるに決まっておる。」

「じゃあ、読んでくれる?」

「だめじゃ。真の言葉を口にすれば、それが真になる。」

「じゃあ、せめて、どんな内容なのか教えてほしい。」

「そうじゃ、そうじゃ、思い出した。お前さん前に、泣く泣くここに閉じ込められた時に、欲しがつておつた。たしか、惚れ薬じゃつたな。」

「ほれぐすりい?じゃあここには、そんなことしか書いてないの。」

「そんなことは、なんじゃ。人がせつかく、探してあげたのに、

その言い草は。全く、最近のわかいものは。」

「で、どうやつて作るの?」

「秘密じゃ。」

「なにそれ、教える!」

「いやじゃ、だれがおしえるか。それに、おまえにほれさせられた男が可愛そうじゃ。あわれ、あわれでしかたない。」

「なによ、そのいいかたないじゃないか!

「昔な、婆様がわしに恋をした。それは、それは、激しく恋をした。じゃがな、わしは色男じゃつた。」

「じい様、いきなり何を話します。」

「それでもなあきらめきれなかつたようで、ようやく一冊の本にたどり着いた。誰も読めないよ言われていたが、婆様にはよめたようじゃ。そして、ホレ薬を作つてわしに飲ませた。それで、めでたし、めでたしじゃよ。」

「話が飛び過ぎだよ。」

「お前に、これをやるう。」と言って小さな小袋を差し出した。開けてみると、丸薬が3つはいつている。

「婆様が残したほれぐすりじゃ。本当に、わし一人残して、どこに

いってしもうたのか。」

じい様は、ばあさま、ばあさまと小さくつぶやいていた。

「あのー、この本もらっても良いですか？」

「絶対にダメじゃ。わしの宝物じゃからのう。ひとりになった今、わしの唯一の話し相手なのじゃ。じゃが、ここにいつでもきてもよいぞ。そして、この日差しを浴びながら読んでみれば良い。」

キララは、解放された。久々のしゃばの空気だぜ。のごとくキララは新鮮な空気を胸いっぱい吸い込んだ。ふーっと、吐き出だして、じい様のことをおもった。不思議な人だった。しかし、なんであんなところに住んでいるんだろう。

*

「いつてきまーす。」

キララは、元気よく帚を掴むと、ためらうこと無く、手すりから飛び降りた。ふわっと体が浮いて、学校目指して飛び始めた。

両手離しても飛べるぞ！朝日が水平線からこぼれて、朝露で濡れた家々の瓦きらきらと輝かしている。

キララは、塔の上に止まっていた小鳥におはようを言ったり、家を飛び出して行く子供達を見ながら、のんびりと飛行をしていた。しばらくすると、同じように空を飛ぶ仲間達の流れと合流した。自由に飛べる筈なんだけど、自然に道というものができてくるんだな。帚に乗っている子もいるし、羽をばたつかせて飛んでいる子もいた。なかには、絨毯に乗っているのはアラビアの魔神君。

ロッカーに帚やら外履きを押し込むと、キララは、教室に飛び込んだ

「おはようー！」

おはよう、おはよう、今日もティナ殿は元気だね。とみんなに言

われながら、キララは自分の席に着いた。そういえば、うららはどうしてるんだろう。

「ティナ、おはよう。」とムッチがキララの後ろの席に座りながら言った。

「おはよう。お乱は？」

「恋煩いで休んでる。」

「え？」

「団子への恋煩い。あの子ね、新しい団子屋ができたみたいなんだけど、いつも駆けつけると売り切れでさ、毎回粘土で色づけされたサンプル見て、悔しがってたの。」

「ふーん。」

「だけど、全然手に入らないもんだから、しまいにはねこんじゃったみたいで。」

「やれやれ、彼女の食い物への心には感心してしまう。」

「ところで、うらら最近見かけないね。」

「あの天使ちゃん？そういうえば、見かけないね。彼女も恋煩いだったりして。」

まさか、あの天然のうららが恋煩いだなんてね。

キララは、変身術の授業を受けていた。この先生のクラスはユニークで人気だった。

「変身術は、私達魔族にとってけて難しいことはありません。

ただ魂の形を一時的に別の形に押さえつけるようにして、変えるので長く持たせるには持続的な集中力が必要です。」

そして、正しい魔法陣もしくは、お札を描く必要があります。」

今までは、魔法陣やお札を書くレッス数が数回にあった。正しく使わないと危険だからね。とにかく、目をつぶっても正しく書けるようにひたすら素振りのように何度も書き続ける。

しかし、今日は初実践の日。みんな緊張した顔をしている。キララは、何に形を変えようか、ずっと考えていた。やっぱり王道は猫かな。先生が一人一人の魔法陣をチェックする。ウサギもかわいい

よな。猿系統は却下。

「では、魔法陣に入って、変わりたい動物を思い浮かべながら、呪文を唱えてください。」

キララは、魔法陣の中心に注意深く立つと、両手を前に広げ、目をつぶると、教わった通りに呪文を唱えた。

ハイルシオーラノ

魔法陣が光に包まれ。キララは体が宙に浮かぶような感覚に捕われた。痛みは無かった、苦しくもなかった、気がつくくと、教室がすごく大きく見えた。

周りを見ると、ぶーぶ、ぎゃんぎゃん、がーがー、めーめーと動物達が騒いでいる。

キララは鏡の前にたった。小さな黒猫が一匹、鏡を覗き込んでいる。くるくる回ったり、しっぽを振ってみたりして自分の姿に見とれていた。嘘みたい！キララは猫になっちゃったよ。

「おやおや、大変な事になりましたね。」と先生の声が聞こえて、振り向くとそこには、ブタの足、金魚のしっぽ、体は犬で、顔は二ホンザルの、小学生の落書きのような動物が途方に暮れて座っていた。

ひええ、どうしちゃったの。

「みなさん、心に雑念があったり、色々同時に思い浮かべるとこのようになってしまう。長崎君、大丈夫ですか？」とその奇妙な生き物に話しかける。うつきつき、とその動物は答えたようだった。なにいつてるのか分からない。

「しかし、安心してください。魔法陣は、きちんと書かれていれば、変に変化してしまっても、時間が経てばきちんともとの体に戻ることができます。」

「さて、これから本番ですよ。みなさんにはこのまま、外に出てもらいます。そして、誰にもばれないように話をきいてきてください。」

からだがもとに戻ってしまつたら、失格です。一番面白い情報をとつてきた者には、単位をあげましょう。」

それつて、盗み聞きしてくるつてこと？なんだか、スパイみたい。他の子達も動物園みたいににぎやかに騒いでいる。

さつそく、キララは、教室の窓から飛び出した。スポンジを足に履いているみたいで、全然足音がしない。草むらをかき分けてどこにいかうかなと考える。とりあえず、校長先生の部屋に言つてみようかな。あのふさふさのあたまどうもあの歳にしては怪しいのだ。かつらだつてという話もあるし。

そうと決めるとキララは、校長室に向かつて走り出した。小さくてもしなやかな筋肉の動きの一つ一つが感覚がキララの足を速めた。運良く窓が開いていたので、ジャンプして窓辺に飛び乗ると、身を低くして、耳を木の葉のように動かして、あたりの様子を伺う。

部屋には畳が敷き詰められ、壁にはぎつしりと本が並べられている。その上には、歴代校長の絵が飾られている。窓のすぐ下には、背の低い書道用の小さな机。その上には筆とまだ白紙のままの紙が置かれている。残念、誰もいないみたい。

とつぜん、ばさばさと小さな音がして、キララはぴくつと体を縮ませた。よく見ると、小さな鳥かごが置いてあつて、そこには黄色の可愛い小鳥が、止まり木に座り込んで、くりくりと首を動かしている。

ひたつと畳に飛び降りると、キララは、その鳥かごに近づいた。かわいらし小鳥は、驚いて逃げようとするが、オリに遮られていて、ひたすらぶつかるばかりだ。

じわつとキララの口の中によだれがあふれてくる。かわいいこちゃん、かわいいこちゃん、こつちへおいで、食べてやろう。

あれ、キララは何をやつてるんだ？こんなに可愛い鳥を食べることを考えているなんて。しなやかな、前足がかってに動いて、鳥かごの中へ伸びて行く、もう少し、もう少しで手が届く。

と、人の声が聞こえてくる。しまった、校長だ！焦ったせいなの

か、差し込んだ手が人間の手に変わってきて、抜くことができないもとに戻れとキララは集中した。ざっと、障子が開いて、校長がびつくりした顔で、こちらをみている。

「この猫が！わしのぴーちゃんになんて事を。」といって飛びかかってくる。

キララの片手がもとに戻り、間一髪のところ、校長の一撃を交わすと、開いたままの窓から外に飛び出した。後ろの方で、校長の悪態が聞こえる。

だいぶ遠くまで逃げると、キララは足を止めて、何度も後ろを確認して、誰もいないのが分かるとほっとした。あーあー、心臓が止まるかと思つたよ。

キララはしばらくの間、猫であることを楽しんだ。足の裏に当たる柔らかい土の感触、ミルクのように滑らかな毛、しなやかに動かしことのできる体、猫であるってこんなに素敵なことだつたんだな。このまま、猫で一生すごそうかなと飯場本気で考えている。

そよ風の吹く草むらに座り込んで、にかーと太陽に向かって笑っている、誰かがにやあにや言いながらキララに近づいてきた。振り返ってみると、いかにも柄の悪そうなら猫がどっぷりと構えている。げっ。なんのようだろう。一応名前を名乗っておくにも、ネコ語が分からないし、キララのにやあにやあは通じないんだろうな。「にやにやにやーにや」と必死で何か訴えている様子だが、どうにもこうにもさっぱり分からない。のでこちらも、適当ににやあにやあと言ってみる。

すると、嬉しそうにこちらに近寄ってくるではないか。あまりキレイとは言いがたい体をすり寄せてくる。

キララの背筋がゾワツとして、思いつきり横っ面をひっぱたいてやった。

それでも、にやあにやあといつて、今度は後ろからキララの上に乗ろうとする。なにするんじゃと、何度蹴っ飛ばしても、追っかけてくる。いや、離れる、バカと言ってもどら猫には通じない。

とつとつ、捕まってしまうって、重たい体がのしかかってくる。悲痛の声でにゃーと叫んでいると、突然誰かがキララの体を持ち上げる。

「おいおい、春だからって、嫌がっている女に発情するもんじゃないぜ。」と聞き覚えのある声がする。

あのスケベ男のマトロウである。

嫌なやつであっても、ここでは命の恩人である。キララはできる限り猫らしく、にゃーと泣くと、マトロウの胸に顔をこすりつけて助けてくれるのサインを示した。

「ほら、嫌がつてるじゃんかよ。」

どら猫はふしゅーっと全身の毛を逆立てて、威嚇している。

「女を取られちゃ男が廃るってか。」とマトロウが、片足でどら猫を蹴り飛ばしながら言った。

「だがな、女が嫌がつているのを無理矢理って言うのは道德に反するぜ。」

いや、お前に言われたくないだろうとキララは言う。

「ほら、こいつもいやだって言うてるじゃないか。それにな、お前みたいな不細工にこんなべっぴんさんはもつたないぜ。」

どら猫はあまり素早いとも言えない体で、マトロウに飛びかかってくるが、ことごとく、けり飛ばされると、しっぽを抱えて逃げ出した。

「おれっちの勝利。」などと、たいしたことも無いことで、喜んでいる。

「さてと、お前の名前はなんていうんだ？」とキララを持ち上げると、顔をまじまじと覗き込んだ。

キララもまじまじとマトロウの顔を見つめる。大理石のように肌はすべすべだし、すこし人を馬鹿にしたようないたずらっ子のような目はきらきらと輝き、よく動く大きな唇の右端には小さなほくろが一つ。繊細なあご。こうやってみるとハンサムな顔をしている。「なんだかな、お前に似たやつ知ってるような気がするんだよな。」

貧乳で暴れん坊の女。ちびだし、女に見えないんだぜ。」

それって、キララの事ですか？やっぱり腹立つは、この男。

マタロウは、キララの体を腕に抱くと、校舎の方に向かって歩きだした。

「なあ、面白いもん魅せてやるぜ。まあ、俺にとってはいつもの光景だがな。」

マタロウは校舎の瓦に飛び乗ると、そこに座り込んだ。キララは何をするのかとマタロウの顔を見上げると、しっと口に指を立てて、下の方を指差した。

そこには、彼の親友である、早乙女弟が立っている。こんなところで何してるんだらう。すると、女の子の音がする。

「妾は、おぬしに惚れておる。」

早乙女は冷やややかな目でその女の子に目をやった。あの、キララに靈魂玉を取るようにと言ったお菊であった。

彼女が靈魂玉が欲しかった理由ってこれだったのか？とキララは今頃気がついて感心していた。

「なぜ、何も言うてはくれぬのじゃ。妾の心が誠であるのをなぜ分かってくれぬのか？」

早乙女が口を開いた。「俺は、お前みたいな女がドイツ嫌いなんだ。」

お菊は、驚いたようだったがすぐに口を開いた。「どこが行けないのじゃ。おぬしのためなら、お前の好きなように変わろうと努力しよう。」

「全部だ。お前のブス顔なんか見たくない。」

お菊の目からハラハラと涙が頬を伝い落ちてゆく。その横顔は悲しみでゆがんでいた。今の言葉を受け入れられないかのように瞬き一つせず、早乙女の石のように固い表情を見つめている。

「なぜ、おぬしは、誰とも喋らず、友達も恋人も作ろうとしないのじゃ？なにか、わけがあるのなら、妾に話せよ。おぬしに苦しみがあるのなら妾がその苦しみを和らげよう。後生だから、口を開いて

くれ。」

マタロウは、キララの頭を撫でながら、身を乗り出した。

「ほお、たいていは、最初のセリフで泣きながら逃げて行くんだがな。粘る女は珍しいぜ。」

早乙女の目に憎しみの炎が燃え上がった。そして、お菊に手を伸ばすと、おもむろに首元を掴んだ。

「何をするのじゃ。」

「俺にとっては、お前みたいなおんなは目障りなんだ。虫けらにか思っつてない。殺されたくないと思っつたら、とつととおれの前から消えろ。」

お菊は地面に崩れると、しばらくの間、体を震わせて泣いていたが、すぐによろよると立ち上がると、悲しみの目で早乙女を見つめると、その場から姿を消すように走って行ってしまった。

「短い喜劇つてとこだな。まったくいつもこの舞台を用意するのに苦労するんだぜ。早乙女がなんせやる気が無いんだからな。人間の不幸ほど面白いものは無いのに、あいつにやそんなこと分かってないみたいだしな。この前なんか、友達呼んでみてたんだぜ。女の子の方がすぐにおんおん泣き始めて、すぐに終わっちゃったがな。つて、痛っ」

「あんた何様のつもりなの、最低！」キララは、マタロウの顔をひっぱたいていた。やつの顔には赤い線が浮かび、血がながれてくる。キララは元の体に屋根のふちに立っていた。案の定バランスを崩して、どしんと茂みの上に落ちた。

「お前！」

キララは痛いのも忘れて、立ち上がると、怒りをあらわにした。

「人の不幸が楽しい？あんた、頭おかしいのよ。信じられない。人の心はもてあそぶことしかできないなんて。」

「それにね、早乙女あんたも最低よ。恋する女の子の気持ちにあんな言い方するなんて、ものには言い方って者があるんだから。」と頬を紅潮させる。

「お前、変身して黒猫になつてたのかよ。おつかしい奴だな。」と頬に手をやってついた血をメロリと舐める。

「ぜんぜん、分かってないんだから。」

「お前はぜんぜんわかつてないんだな。」とマタロウが、ヒョイツと屋根から飛び降りるとキララに近寄つてきた。それって、こつちのセリフなんだけど。

「俺は、お前じゃないし。お前は俺じゃない。」

「何よ、そんなこと当たり前でしょう。」

「お前が美しく咲き誇る花に心を奪われるのなら、俺は、その花を足でにじり踏むことに快感を覚える。」

キララの手が、木板の壁に触れる、それでもマタロウは近づいてくる。

「それは、あんたがおかしいのよ。」とキララはマタロウの顔を真つすぐと見て言った。

「それが、俺だけじゃなくて、悪魔全体だったら？それが、おれたちにとつて持って生まれた感性、世界の見方だったら？」

「それは……」

「だからいったらう、俺とお前は違う。その感性の違いで、いつも嫌われてきてしまった、俺たちはどうすれば良いんだ？俺たちに取つての喜びを求めることが間違つていないのか？」

「そんなこと、考えたことも無い。」とキララは口の中でつぶやくように言った。

「だから、お前は黙つてろ。」

それでも、それでも何かが間違つてる。うまく口では言えないけど間違つてるとキララは心の中で思った。

「たとえば、それがあなた達にとって楽しいことであっても、ティナはそんなの絶対にいや。間違つてるとは言えないけど、ティナには許せない。」

マタロウはキララから離れると言った。

「そうか、それじゃしかたないよな。俺お前に興味があつたんだぜ。」

お前変わってるもんな。早乙女にも良いことだと思ってたんだがな。」
それって、どういう意味なの？キララが変わっていると、何かあったらとってプラスだったわけ？
マタロウは早乙女の肩を叩くとあばよといって去って行った。

*

キララは、お菊を探していた。彼女は、厩舎の屋根の上に一人、座っていた。

しかし、なんて言ったら良いんだろう。一度は喧嘩みたいのもしたし、まさか、一部私情を見ていたとは言えない。

「いやー、今日はいい天気ですな。」とキララはとりあえず、お菊の横に座りながら、言ってみた。

「何様のつもりじゃ？」

「いや、ちょっと話したいかなと思ってさ。」

「何も話すことはない。帰れ。」

「いや、なんかあるでしょ。」

お菊は何も言わない。うう、気まずいな。

「大丈夫だって、気にしない方が良くよ。振られらぐらいで。」

「お前、見ていたのか？」

しまった、

「いや、その、見てたと言うか、見てなかったというのか。」

お菊がきつとこちらを見つめてくる。目が赤らんでいる。やばい、逃げようか、この子一応いじめっ子だし。

「そう、恥ずかしいところを見られてしまったな。」

あれ？

「妾が靈魂玉を欲しい理由が分かったじゃろう。妾は早乙女様に惚れておる。振られてしまったがな。」

「いや、あんな男さ、たいしたこと無いよ。お菊三はキレイなんだから、もつと良い男をみつけて…」

「あれ程、よい男が他にいと申すのか？早乙女様の悪口をお言い出ないよ。」

「ごめんなさい。」

「よい。妾は、この学園に入ったときから、ずっと早乙女様の事を思っておった。だが、あのお方は一度として、おなごに目を向けたことがなかった。」

「それは、あいつの感性が。」

「妾は、あのお方がどのような人であれ気にはせぬ。思いは一途なのじゃ。」

恋心つてめんどくさいんだな。キララには一生分からないかも。

「あのさ、早乙女の靈魂玉、お兄さんの持つてるんだけど。」

「知っておる。」

「どうして、弟が好きなのに、お兄さんのも欲しかったの？」

「早乙女様は、自分の家族のことを憎んでおられる。もしも兄上の心を手に入れることができれば、少しは妾に目を向けてはくれるかもしれないと思ったのじゃ。あのお方は、天使族の子となのに悪魔として生まれてしまった。兄が天使に生まれたのに、なぜ弟が悪魔なのじゃと苦しんでおられるのが妾には分かるのじゃ。」

「そうだったんだ。」

「あのさあ。早乙女の靈魂玉は持ってないけど、これ、あげる。」
と言つてじい様からもらったホレ薬を差し出した。

「なんじゃ？」

「ホレ薬だけど。」

「どこで手に入れたのじゃ。お前のような小娘が作れるわけが無かるう。」

「もらったの。」

「誰から？」

「そんなことどうでも良いじゃん。ほら受け取って。」

お菊は、震える手でホレ薬を手にとると、懐に入れた。キララはさっと立ち上がると「じゃあ、がんばってね。」と手を振ってその場を去って行った。

「ただいまっ！」

キララは小学生らしく、元気よく最上階にある、自分の部屋の廊下に飛び込んだ。

「葵さん！」

葵は、キララの部屋にきちんと座って、一度お辞儀をすると、真つすぐにキララに顔を向けた。その目は涙ぐんだようにつつすらと赤くなっている。

「どうしたの？」

「姫様、姫様。おめでとうございます。嬉しいお知らせでございます。詳しくはお父様のお口からおききになってください。」といて、小袖で目元を抑えている。

パパが帰ってるんだ。キララは、葵につれられて、大座敷へと足を入れた。

「パパ！お帰りなさい！」と言って、ひらひられレースのついた純白のシャツの胸に飛び込む。

パパは、キララの頬にキスをしながら言った。「キララ。見ない間にまた、美しいレディに近づいてきたな。」

パパは、絶対に歳を取らない。少し年上のハンサムな男性。いつも中世ヨーロッパの服を着ている。180センチ以上はある長身にひらりとかかとまで長いマントを身にまとっている。血がつながってはいないとはいえ、キララの事をいつもレディと呼んでくれるのでお兄さんのように慕っていた。

ママが「ちよっと、あまり父上にべつとりするんのではない。レディらしくもないぞ。」と言うと、パパは、キララをおろして真剣な顔をした。

「キララ、すばらしい話がある。」

「はい。」

「前にも話したことがあるだろう。帝の宮殿入りができるかどうか。」
「今日帝から、手紙があった。ぜひとも、お前に宮殿入りをしてほしいと。」

「それは。」とキララはいまいち理解できずに訪ねた。

「良いことだ。お前が、お世継ぎの妃に選ばれれば、お前に取っすばらしいことなのだから。」とパパは顔をほころばせている。

妃？王女様ってこと？

「なんだ、すつとんきよんな声を出して。そうだ、王女様。それで、沢山跡継ぎを作って、大家族を作ろう！」

それって、結婚しろってことだよな？子供ってキララは、まだ小学生なのに。

「お世継ぎも、お前と同じぐらいの歳だったな。たしか。」

「50歳位だったかしら。」とママが口を挟んだ？

50歳っておじいさんじゃないか。

*

「はい。確かに姫様は50歳でございます。」

葵は、いつもの通りきちつと正座をして、くすくすと笑いながら言った。魔族は長生きなのだ、小学生は50年生きた位。ママは、250歳位。パパも同じ位生きている。さらに言えば、ばあやは1000年以上生きているらしい。いったい歳の分だけのろうそくを立てられるバースデーケーキってどんなんだろう？

「で、葵さんは何歳なの？」

「秘密でございますよ姫様。おなごの歳をきくのは失礼に当たりますよ。」

「いいじゃん、教えてくれたって。」

「姫様よりすこし年上でございます。」

「ところで、宮殿入りして何をするの？」とキララは、畳の上に仰向けに転がりながら言った。

「帝に気に入られるように勤めてください。」

「それって、誘惑しろってこと？」

「まあ、姫様。おませなことをおっしゃられる。一口に言えばそのようなことになります。」

「だけど、どうやってキララが好きになるかも分からない男の子に誘惑すれば良いの。というか、なんでキララがこんなことしなきゃいけないのかな？」

「我が百怪家は、代々帝にお使いする家柄なのですが、ちょうどクリスティーナ様騒動でしばらくの間、宮殿使いを控えていたのでございます。しかし、今回帝直々にお手紙をいただき、我が家もまた元のように帝に使えることができそうなのでございます。」

「で、それがキララの腕にかかっているってことなのね。」

「そうでございます。」

「で、クリスティーナ様騒動って何があったの？」とキララはあの自由方便なママの騒動については検討がついていたがきいてみた。

「実は私めもまだ生まれていなかったときでございますから、ばあや様から聞いたお話でございます。」

「うん。」

「がらっと、扉が開いて、ばあやが障子の前にちょこんと座っている。」

「ここからの話は私がお話ししましょう。」

「やれやれ、この家の人間は暇人が多いようだ。だけど、キララは思った。それともこれが人間に取って程よいペースで、キララの世界が汗くさしすぎてるのかもしれない。」

「ばあやは湯のみと甘菓子盆を畳の上に置くと、いま葵が座っていた座布団の上に座った。」

「あれは、ちょうどクリスティーナ様が姫様と同じ位のことでございます。いと美しく、ただ座っていれば葉のうえに溜まる白玉の

ように愛らしいお方でした」とばあやが語り始めた。

「しかし、お嬢様は白玉どころか、海のようなじゃじゃ馬でございました。」と遠い目をして、天井に目をやっている。

「今のような蛮人の名ではなく、お父様からは、琴葉というすばらしい名前だったのでございます。さて、我が家は、帝の側近としての勤めはもちろんのこと、強い権力を持っておりました。当然のことながら、帝の妃候補にクリスティーナ様選ばれたのもとうぜんの事柄でございました。」

「当時は、まだ天皇家そして百怪家の血を次ぐ者がおらず、お父様はクリスティーナ様に大きな希望抱いておりました。宮廷上がりをしたクリスティーナ様はあのような容貌の美しい方ですから、すぐに帝に気に入られました。がしかし、家から離れたのがいけなかったのでしょうか、毎晩のようにお酒を飲み始められて、汚い言葉を履くようになったのでございます。それでも、帝のご寵愛は変わることなく、寛大に見ていただいていたのです。しかし、ある日とうとう、他の男を部屋に引っぱり込んで、それが帝の耳に入りました。」

ばあやは、ふーっとため息をつくと話が続けた。

「帝は大変にお怒りになられ、クリスティーナ様は、宮殿から立ち退かなくてはなりませんでした。周りからの悪評やうわさ話がひどく、ある日姫様は、海外に留学にいつてまいる。っと言って、家を出て行ってしまわれました。」

「そして、しばらくして、突然門の前に帰ってこられました。私はそれはそれは、嬉しくて服が乱れるのも気にせず、お出迎えに上がったのです。しかし、姫様の傍らにはどこぞの馬の皮とも知れない蛮人の男が一緒におりました。」

そして、姫様は、おっしやられました。妾はこの男と結婚するぞよ。

私は気が遠くなり、地面へとはたりと倒れてしまいました。その男こそが今のお父様のタジオ様にございます。」

ママがそんな騒動を起こしてたんだ。いくら時間が経ったとはいえ、まだ覚えてるよね。キララはプレッシャーを感じていた。ここで、なにか粗相をおかしたら死刑になるかも。

お休みをいって葵達が部屋を去ると、キララは、一人考え事をしてた。宮殿に行ったら、学校には行けないんだよね。お乱やうらら達にもあえなくなるのかも。この世界で唯一のお友達なのにね。それもと宮殿に呼んで、自慢しても良いかも。

跡継ぎはどんな人なんだろう。やっぱり、この世界を治めるだけの重さを克服できる人。きつと、ハンサムで頭が良くて、きりりとしているに違いない。キララ好みのハンサムだと良いんだけど。

色々考え事があるような木がしたけど、キララのまぶたは既に重くなっていた。まあ、いいか、明日には明日の風が吹くだよね。

その夜キララは、艶やかな着物に身を包み、キララの理想な男の横に座って、国を治めている夢絵を見た。

Twelfth Candy : お興入れ

ぎゅう。

「苦しい。葵さん、苦しいよ。」とキララは、息をするのもままならなかった。

「姫様、姫様、我慢なさってください。」葵は、帯をキツくキララの胸に巻き付けながら言った。

今日は宮殿入りの朝である。屋敷中どたばたと慌ただしく準備をしている。

キララは、桔梗色と呼ばれる紫の着物を着ていた。わざわざ、都一番の着物屋に注文して、この日のために作られたのだ。淡白の花びらが刺繍されていてなんとも美しい。振り袖が、キララの背よりも長いので、引きずるか、手に巻き付けるかしておとなしく、歩かないと踏みつけて転びそうだ。

顔には軽くおしろいをはたいて、口をすつと赤く塗る。天然パーマの髪の毛は後ろの方で一つ結びにして、着物と同じ色の布で蝶結びにされた。

「姫様、終わりました。」と言って葵がキララの目を両手で隠して、他のメイドに合図をする。

「吾人の姿をご覧になってください。」と言って、葵が手を離すと、目の前には大きな鏡がおかれていた。

キララはゆつくりと、鏡を見つめた。キララじゃないみたい。いつもはやんちゃな顔は、赤々と光る唇に飾られて、大人っぽくつややかに見えた。

「姫様、ご立派になられて。ご一緒に参上できないのが、うらめしゅうございます。」と言ってはあやが、涙ぐんでいる。

キララと一緒に来てくれるのは葵だけだった。ママともパパともしばらくの間お別れだ。せつかくできた友達ともなかなかあえなく

なるのだ。

今までずつとばあやから毎日のように、宮殿での振る舞い方についてきかされてきた。宮殿では今までのように自由に生きることは許さない。細かく決められた身分制度、言葉の使い方、振る舞い方など全て慎重に選びながら行動しなければならぬ。姫様がこれからの百怪家の未来の鍵を握っているのですよと何度もきかされていた。

そうキララは全然知らなかったけど、百怪家は廃れつつあったのだ。昔持っていたその権力と財政は、ほとんどなくなっていた。

このまま放つて置けばやがて、この家も無くなり、百怪の名は過去と共に永遠に葬られるのである。巡り巡る時間の中で、新しいものが古いものをかき消すのは定めだとあきらめている者もいるけど、キララはそんなの絶対に嫌。キララは、この家が好きだから。私の家族がここにいるから。

キララはゆつくりとした歩調で、玄関まで葵に先導されて歩いていった。弟がキララの前に立ちはだかった。あいかわらず、冷たい目でキララをさすように見つめてくる。

「姉上、参内おめでとうございます。」と言って、頭を下げる。

「ありがとうございます。あとのことはよろしくね。」

「一つだけききたいことがある、お前は本当に姉上なのか？」

まだ疑ってるのか。葵が心配そうに振り返る。キララは、大きく息を吸い込むと弟の頭をばしつと叩くと、腰に手を当てて、大きな声で言った。

「妾は百怪家の長女百怪ティナじゃ。お前は、こつやって家のために身を尽くす姉のりつぱな行いを見習って、しっかりと家を守るのじゃ。わかったな。」

弟はしばらくの間目をぱちくりさせて驚いていたが、すぐに何も言わずに、キララに道をあけるようにわきにどくと、頭を下げた。

屋敷の前には、大きな行列ができていた。宮殿からの迎えである。玄関のちようど真ん前には、大きな輿こしが置かれている。

迎えの者達は総勢20人ほど、皆片手に帚を持って立っていた。みな、固い顔をしていて、キララの方も見向きもなかった。4人の背の高く強そうな男が見越しの四辺に立っている。多分、彼らがこの輿担ぎながら飛ぶのだろう。

「美しい輿でございますね。」葵がうつとりと言った。

豪華絢爛と四文字熟語がぴったりとあいそうな輿だった。小さな家のよう、悪く言えば犬小屋のような箱には、黒い漆がツヤやかに塗られ、金や銀で四季の花々の文様が優美に描かれている。

「妾の大切なティナよ。どうか、体を大事にして、いつもママのことを忘れないでね。」とママが、キララを抱きしめた。そして、キララの手には朱色の小袋をのせた。宝の小箱の中身を散らしたように魔法記号が刺繍してある。

「これは？」

「お守り袋じゃ。お前が本当に必要だと思った時に、開けるが良い。必ずやお前を支えてくれるじやろう」

キララは、パパにお別れのキスをする、百怪家のみんなに手を振ると、開かれた輿の扉の中へと体を押し込めた。

「ご出発！」と先導の者が声を上げると、輿がぐらぐらと動いた。すぐに体が重たくなる。空を飛び始めたんだ。みんなの別れの声がある。

キララは、右についていた小窓を開ける。遠くの風景しか見えな。輿の中は金箔が一面に貼られぐるりと絵画描かれている。キララの正面には、光に包まれて若い男が立っている。片手には、鋭い月形の刃を持ち、もう一つの片手には、鬼の生首を空高く掲げている。そして、他の鬼達が、男の光と力に驚き、泣く泣く逃げている。そして、それを追いかけているのは、帚にまたがり、血を吸い付くした刀を振り回す魔女達。

キララは、少しずつ不安になってきていた。帝って本当にどんな人なんだろう。

遠い！遠すぎるぞ。あんなに近くに見えたのにいくら時間が経つ

ても宮殿につく様子が無い。いい加減、お尻が痛くて仕方ないのに、この小さな犬小屋に閉じ込められて、でたたくても出られない。喉も乾いている。

やっと、やっとたどり着いた。地面に輿がおろされたのをキララは心の底から喜んでいた。小窓から見える、宮殿の美しさは置いておいて、キツラはひたすらお尻をすくいたくて仕方なかったのだ。キララが、扉を開けようとすると、外にいた者が驚いて閉めてしまった。

「まだ、開けてはなりません。」

それから、悪夢の30分が始まった。何にこんなに時間がかかるのだろうか。キララは、身動きの取れないままこの拷問部屋で意識がもつろろとしていた。

「おなーりー」とよろよろした声が聞こえて、扉が開けられた。キララは半ば転がり出るように外に飛び出した。

「お尻よ。たすかったぞ！」とつい、体を伸ばし、声を出して叫んでしまった。

みんなが、体をこわばらせて見ている。しくじった。キララは、顔をうつむけて、キララを迎えにきた宮殿の者に頭を下げた。周りでくすくすと笑い声が聞こえる。

「ようこそ鳳凰宮殿へ。私が姫様をお部屋までご案内させていただきます。」と、髭を整えた男がキララに頭を下げた。しかし、なんと広い玄関先なんだろうとキララは感心していた。四方は白く塗られた壁に囲まれて、砂利が一面に敷き詰められている。ここなら今日学校の運動会もできそう。そして、沢山の人たちがキララを見つめていた。宮殿に住む貴族たちだ。皆、キララが住んでいた場所とは違い、洗練された格好をしていた。女の人たちはみんな高貴で粒ぞろいだし、男もきりりとカッコいい。

なんだか引け目を感じるな。キララは、案内について宮殿へと入っていた。今度はぴしっと正装した女の人たちがキララを向かい入れた。「お部屋までは私がご案内させていただきます。」

キララは、右に曲がったり、左に曲がったりと迷路のような宮殿の中を歩いてゆく。沢山の部屋の前を通った。中に人の気配がするときもあれば、聞こえがよしにキララの悪口を言う者もいた。

「百怪家の下町娘が宮殿入りじゃと。」

「くそつて、たまらんわ」

「落ちぶれている者の最後のあがきかのう。」

歓迎されていない。キララは、何も言い返せないのがくやしくつても、見た目は何も聞こえないような顔をして、耐えていた。早く部屋についてしまえ！

部屋についてからも大変だった。とにかく次々に人の出入りがあって落ち着いている暇がなかった。キララの服を変える人、食事を運ぶ人、用事がある時に呼ぶ人、小さなことにもそれぞれの役割が決まっについて、その人に頼まなければならぬようだった。

ようやく、落ち着いてくると、食事が運ばれてきたが、黙ってくつついているお付の者と一緒に一人で食べなければならなかった。ようやく一日の重荷が下りたのは、だいぶ夜が更けた頃だった。

「姫様、姫様、入ってもよろしいでしょうか？」

「うん、葵さん？入りなよ。」

葵は、障子を静かに開けて入ってくる。キララはやつと体が軽くなったような気がして、正座でしびれた足を投げ出した。

「おつかれさまでございます。大変な一日でございましたね。」
「ろ
うそく光のせい
か葵の顔もやつれて見える。」

「本当に、ここつていつもこんな感じなのかな？」

「そうだと思いますが。」

「なんだか急に身分が上がっちゃったって感じかな。色々ルールがあつて息苦しいよ。」

「そのうちになれますでしょう。」

「なんだか、葵の様子がいつもと違う。口数も少ない。」

「ねえ、葵さん肩でも揉もうか？」

「え？」

「だって、つかれて見えるから、肩でもこっつてるかなって。」

「めっそもございません。私は大丈夫でございます。」

「そっか、だけど早く寝た方がよいね。明日も朝早そうだし。」

「そうですね、明日は始めて帝にお会いになる日。私は今から緊張しております。」

「なんだ、葵さんは気が早いな。」

キララは、立派な寝台に身をなげだすと、三つも数えないうちに、いびきをかいて眠りだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3621g/>

スイッチ！！江戸っ子魔女キララが行く！！

2010年10月26日20時11分発行